

599
111



3

0038876-000

599-111

世界各種秘密結社の研究

納武津・著

一進堂書店

昭和4

AGH

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

34.4.21

前早大教授

納

世界各種

秘密結社の研究

武津著

東京一進堂刊行



はしがき

若しも人間といふものが、徹頭徹尾、明るく、無我で、ザツクバランな、腹藏なき性質のみを、有するものならば、従つて又た其の社會生活が、飽くまでも公明正大で、自由平等な、且つ片輪落ちのないものであるならば、固より忌はしい秘密結社とか、或は陰謀團など云ふものは、此の世の中から全然其の影を没したことであらうが、所で事實は必ずしも然うでなく、人間性の中には、那邊にか或種の暗い内證ごとを好むらしい方面があり、其の上に人間社會なるものも、何時も朗かな秋の空のやうな事柄ばかりはなく、時とする

と、宗教的の迫害があつたり、経済的の搾取があつたり、又た時とすると、政治的の壓制があつたり、民族的の反感が行はれたりするから、そこで社會の裏に廻つて、自らの不平、不満、怨恨、無念を晴らさんと企つる、一部不逞者の恐るべき各種の陰謀團や秘密結社やも、生まれ出るのである。

だから、白晝公然と自らの心中を、世人に訴ふことをせず、却つて人目を忍びつつ、秘密の裡に、徒黨を結んで、窃に私心を遂げようとする一派は、固より擧覺するに餘りあるが、而も亦た此の様な闇を好む毒菌を生ずる社會や時代やも、固より決して健全なものと稱することは可能ぬ。而已ならず、其の社會、其の時代は、少くとも是等の毒菌を、培養し得るほどの何等かの腐敗、弊害、不正、

缺陷等を、包藏せるものと断定しなければならぬ。

されば社會若くは時代を、其の内部より、人知れず毒殺し、而して殄滅しようとする、此の怖るべき秘密結社若くは陰謀團が、單に比較的蒙昧な古代及び中世紀の人々間に、存したばかりでなく、又た文明人を以て誇る吾々の間にも、依然として頻出するのは、眞に憂ふべきことであつて、今にして是れが、對策を講ずるにあらずんば、現代社會は、遂に取返しのかぬ悲運に陥らぬとも限らぬだらう。

元來予は社會學を専攻する一介の學徒に過ぎないが、現に北米合衆國のクー・クラックス・クラン、露西亞の共產主義陰謀團、伊太利のファシス團、並に總ての國家に巢喰ふて居る無政府主義者團や

虚無主義者團等の戦慄すべき過去の行動を知るに及び、是等は我國人としても、決して對岸の火災視すべきでないと思ひ、斯くて古より今日に到るまで、世界の各地方に行はれた、著しい各種陰謀團若くは秘密結社の特色なり、性質なり、將た所業なりの一般を、我國の同憂者に紹介しようとして、爰に本著を公にしたる所以である。讀者是れによりて、聊かでも人類史の裏面若くは暗黒面に、渦巻いて居る魔の淵を、窺き見ることができ、又た斯くて身を衛り國を救ふの一助ともなすことが可能れば、予の幸ひ是れに過ぎたるものなし。

序に一言して置かなければならぬことは、世人或は、ファシス團が既に伊太利で、又た共產主義者團が露西亞に於て、美事に政權を

掌握し、就中ファシス團の如きは、團長ムツソリニーを伊太利の獨裁者たらしめて、伊太利の國威を中外に宣揚することさへ可能たから、斯くの如きを、陰謀團若くは秘密結社取扱ひにするのは、倫を失した不當な仕業ではないかと言ふて、予に反對するかも知れぬが露西亞の共產主義者團にしる、又た伊太利のファシス團にしる、少くとも政權を獲得するまでは、共に紛れもない闇の兒たる陰謀團若くは秘密結社として、活躍したのであるから、予は毫も自らの立場を更むる必要を認めぬ。

x x x

昭和四年仲秋、遠く氏神祭の太鼓の音を聞きつつ誌す。

著 者 納 武 津

目次

緒論……………(一)

第一編 神秘的秘密結社

第一章 上代の秘密結社……………(七)

第一節 秘密教……………(一〇)

第二節 猶太秘密教……………(一三)

第三節 救世主の出現……………(一六)

第四節 エッセン教……………(一九)

第五節	ノスチツク教	(二〇)
第六節	マネス教	(二三)
第二章	回々教に對する陰謀	(二四)
第一節	イスメール教派	(二四)
第二節	カルマイト教派	(二六)
第三節	フアテイマイト教派	(二六)
第四節	ドルース教派	(二六)
第五節	暗殺團	(二九)
第六節	騎士團	(三三)
第三章	惡魔主義と煉丹方士派	(三三)
第一節	惡魔主義	(三六)
第二節	煉丹方士派	(三九)

第四章	共濟組合	(四四)
第一節	共濟組合の起原	(四四)
第二節	現代の共濟組合	(四六)
第三節	歐洲大陸の共濟組合	(四六)
第四節	英國の共濟組合	(四五)
第五節	秘密本部時代	(五五)
第五章	獨逸の騎士團主義と佛國の天啓團主義	(六〇)
第六章	猶太秘密教派と革命	(六六)
第七章	バワリアの天啓團	(七三)
第一節	天啓團の起原	(七三)
第二節	天啓團の理想	(七七)
第三節	天啓團の全盛期	(八四)

第八章 接神學派……………(一五)

第二編 民主主義的秘密結社

- 第一章 佛蘭西に於ける民主主義的秘密結社……………(一六)
- 第二章 西班牙に於ける民主主義的秘密結社……………(一〇三)
- 第三章 伊太利に於ける民主主義的秘密結社……………(一〇〇)
- 第四章 土耳其に於ける民主主義的秘密結社……………(一九)

第三編 民族主義的秘密結社

第一章 希臘に於ける民族主義的秘密結社……………(三三)

- 第二章 愛蘭に於ける民族主義的秘密結社……………(三五)
- 第三章 波蘭に於ける民族主義的秘密結社……………(三九)
- 第四章 獨逸に於ける民族主義的秘密結社……………(四三)
- 第五章 汎スラヴ主義を奉ずる秘密結社……………(五一)

第四編 犯罪的秘密結社

- 第一章 波斯に於ける犯罪的秘密結社……………(八一)
- 第二章 印度に於ける犯罪的秘密結社……………(八七)
- 第三章 西印度に於ける犯罪的秘密結社……………(九二)
- 第四章 西班牙に於ける犯罪的秘密結社……………(一〇一)
- 第五章 ノーブルスに於ける犯罪的秘密結社……………(一〇八)

第六革 シンシリーに於ける犯罪的秘密結社……………(二五)

第七章 亞米利加に於ける犯罪的秘密結社……………(三五)

第一節 マフィア團とカモルラ團……………(三五)

第二節 クー・クラツクス・克蘭團……………(三三)

第五編 破壊的秘密結社

第一章 無政府主義者團……………(二四六)

第二章 虛無主義者團……………(二五五)

第三章 共產主義者團……………(二七一)

第六編 反革命主義的秘密結社——ファシス團……………(三五)

主要參考書目……………(三五二)



緒

論

秘密結社なるものは、例へば政治的地質に、重大な變動を及ぼす地下泉の如きものであつて、流れては、沃々たる綠野を潤ほし、激しては、山岳、神殿、寺院城塞、舊蹟等を、一夜の中に烏有に歸せしむるものである。また秘密結社は、社會を築き上げる大動力ともなれば、社會を根柢より破壊する大禍因ともなり、更に進歩と光明とを齎らす神ともなれば、罪惡と暗黒とを招く魔ともなるものである。

が、秘密結社を運轉中の機關と定義することに、恐らく何人も異議はあるまい。所で此の機關は、(一)偶然の出來事、(二)新しい思想の流れ、(三)社會的

並に政治的事情、(四)事實上或は想像上の不平不満、(五)外人の支配、(六)犯罪的動機等、様々な仕方に於て、其の運轉を開始するものであつて、斯くて、(一)一つの諷刺小説は偶然にも煉丹方士派(秘密結社の一つ)を厥起させ、(二)ルーテルと佛國百科全書編輯者とは、俗人の耳目を覺醒させることにより、全世界を動搖させ、(三)階級的嫉視と大衆の貧窮とは、安價な幾多の救済策を採用せしむることにより、却つて惡弊百出の端を開き、(四)公務の怠慢は、舊い制度の覆没を招來し、(五)希臘人、波蘭人、愛蘭人、獨逸人等、皆なそれ々に陰謀を廻らすことにより、外人の羈絆を美事に脱することが出來、(六)伊太利ネーブルスの常習犯人共は、愛國者の眞似をして狂暴に至る所なかつたのである。

しかし斯う分類はするものの、是れは固より表面上だけで、其の裏面に至りては、互に共通せるものが少くないのであつて、特に彼等の總てを暗中模索すれば

何所かに隠れた手が、何時も活動しつつある事實を吾々は感知するに難くない。また各種秘密結社の機關も、不思議なほどに各國其の揆を一にせるものであつて是れは、幾分他國より借用したからと云ふ理由にも基づくが、而も其の多くは、總ての人心が、其の特質を共通して居るとの事實に由るものでなければならぬ。然らば、何故に秘密結社は生まれるかと云ふに、前述の如く何れもそれ々に特殊の事情を持つて居る筈だから、一概には云へぬが、併し大體上、或種の酸酵雰圍氣を必要とすることは、隠れもない事實であつて、換言すれば一切の秘密結社は、恰も真空内に微菌が湧かぬやうに、何等の酸酵素もない所に、決して湧き出るものでない。そして既に是れだけの素地が出來上がれば、是れに冒險心に富んだ者、空想に驅られた者、私利心の多い者、狂氣じみた者、怠け者等が、漸く群がつて來て、最初は他愛もない動機から、陰謀を企らむことになり、そして遂には革命を起したり、國家を顛覆したりすることにもなるのである。

秘密結社心理は意識的若くは潜在意識的に、機密を好む衝動によりて、支配されて居るものであつて、吾々の總ては、必ずしも詩人たり或は結核病者たる素質を持つて居ないやうに、又た固より秘密結社員たるの天分をも持つて居るものではないが、而も一たび秘密結社心理が注入されて、感染し始むるや、恰も疫病の如く傳播して、到る所に其の猛威を逞うするものである。そして無識、狐疑、輕信、臆病等幾多の弱點を有する人々は、容易に山師共の説得する所となり、斯くて天の寶を濡れ手で粟の攫み取りが出来るものと考へるやうになるから、果ては如何様な秘密をも守る旨の宣誓をしたり、又た爆彈を投げたり、生命を棒に振つたりもするものである。

さう云ふ次第だから、秘密結社によりて、苟も利するものがありとしたならば其れは單に一部少數の山師どもだけで、爾餘の愚かな人達は、何時までも彼等の走狗たり、傀儡たり、彈丸たり、食ひ者たり、下積みたるに過ぎぬではないか。

斯くて希臘人は、秘密結社によりて土耳其人を逐ひ出して了まつたが、其後の國內は、却つて無政府同様になつたでないか。またセルビアの黒手組は、幾多の言語道斷な罪惡を犯し、殺人者の群が横行濶歩して、今しも國民を支配しようとして居るではないか。更に愛蘭人も、サリスベリー卿の豫言を實現して、辛やく自治を得ることは得たものの、而も其の現状は、果して如何。

此を以て是れを觀れば、秘密結社は實に無責任極まるものであつて、法律、憲法、正義、宗教、道德等を蔑視し、言はば國家内に更に一つの國家を設けようとするものであるから、苟も責任を感じる眞の國家は、普通に警察と稱せられて居る他の秘密結社をもつて彼等を彈壓するようにならなければならぬ。が、奈何せん秘密結社は巧みに人心の弱點に食ひ入れるものの如く、容易に根絶さるべくもな
いらしい。

以下項を逐ふて、私は古代より現今に到る世界の各地方に、幾多の波瀾や悲劇

やを惹起したる各種の秘密結社を、論述する積りであるが、それに就けても、呉々も忘れてならぬことは、飽くまでも冷静な態度と、科學的の觀察とを失はないやうに努むることだ。

第一編 神祕的祕密結社

第一章 上代の秘密結社

東洋は秘密結社の搖籃である。如何なる目的のために、それが使用されたかは姑く問ふを止めて、兎に角歴史の舞臺面で、斯くばかり大きな役目を、屢々演じた多くの秘密團體の手本は、何と云つても、人類の大芝居が最初に打たれた記録を貽して居る埃及、バビロン、シリア及び波斯等の國々に發して居るらしい。一方に於ては東洋の神祕主義と、他方に於ては陰謀を好む東洋人の氣風とが、後年に至りて西洋にも傳播し、そして爰に恐るべき大規模な體系を形造るやうになつたのも、強ち不思議の沙汰ではないであらう。

さて是れより秘密結社に就て、研究するに方り、先づ吾々は二つの方向、即ち其の一つは、神秘思想を逐ふて秘密の中に幾多の團體が發達したこと、他は是等の團體が一般に政治上の目的のために神秘と秘密を利用したことを探究しなければならぬ。

神秘主義にも亦二重の方面がある。俗生活の總ゆる方面に於けるやうに、爰にも人の心の白と黒、光明と暗黒、極樂と地獄との表裏両面があるから、秘密の知識を探す中に、或者は神聖な真理の泉に掘り當てることがあり、又或者は暗い陰氣な宗旨に凝り固まつて了ふやうになることもあるが、孰れにした所で、自らの落ち行く先きを神ならぬ身の固より知る由もなからう。で、善きにせよ又た惡しきにせよ、兎に角靈力を利用するやうになると、人間は普通の凡俗より、一段高所に昇ることも出来れば、又一層低い深みに墜つることも出来るものであつて、斯くて人々が結合して團體を成さん時、それより生ずる集合力は、懸て周圍の世

界に、大きな波紋を投ずるやうになるものである。秘密結社の影響、此に於てか大なりと云はなければならぬ。

概して云ふと秘密結社は必ずしも常に悪い目的のために組織されたものでなく却つて多くの場合、人心の最も高い憧憬たる永久の真理を知らうとする欲望から發生したのであつて、偶々それから惡事が生まれ出たのは、全く其の本旨を穿き違へたものに外ならない。

太古から道士 (initiate) 若くは賢人なるものがあつて、俗人の知るべからざる神秘の理を究め、又人間の起原や歸終、死後に於ける靈魂の生活、並に神々の性質までも、總て知り盡して居ると稱されて居つた。近世の神秘教者 (occultist) 等が動もすれば混同したがる往古の道士と、宗教の大傳道者との間に存する重大な軒輊は、實に爰にある。例へば佛陀とか、マホメットなどの如き大傳道者は、世界に弘めるために眞の道を求めたのであるが、是れに反し道士達は神秘の奧義

を、汚れた俗人に示さないで、何時までも自分獨りの心に、秘めて置くべきものであると信じたのであつた。

一節。秘密教。 總ての主なる秘密教には、共通した或種の思想があつて、それが違つた時代、並に國々の道士を経て、代々に傳はり、斯くて連綿たる一つの傳統となつて居るのである。是等の思想の中に、神の統一に關する觀念もあつたと云ふことだが、多神教の方が、寧ろ俚耳に入り易いと云ふので、民衆には是れを説くのが、望ましいと見做されて居つた。然るに道士そのものは、天地を造り又萬物を支配し給ふ、唯一の神の存在を信じて居つたのである。それでル、プロンジオン (Le Plongeon) も「萬物を作り給ふた全智全能の唯一神こそは、文明の高度に發達した總ての民族の間に行はれた、往古の信仰であつたらしい」けれども、埃及、カルデア、印度若くは支那等の僧侶や學者達は、「此の教理を秘密教に通達した一部の「選ばれた人々」のみに傳へた」と述べて居る。此の様

見解は、他の多くの著述家にも支持されて居るが、遺憾なことには明確な史的證據がない。

然しモーゼ時代以前の埃及に、既に一神教が存したことは事實であつて、此のことは、アドルフ・エルマン (Adolf Erman) も裏書きをして居る。が、此の教義を一般民衆に公然と宣揚したのは、アメンホテプ四世 (Amenhotep IV) 後にイクナトン (Ikhnaton) として知られた人であつて、ブレステッド (Breasted) 教授は、イクナトン自身で、寺院の壁に書きつけたとか云ふ、日輪の神の讚美歌を記してゐるほどである。

歐羅巴で秘密教が最も早く現はれた所は、夙にエルシニア秘密教 (Eleusian Mysteries) なるものの存在した希臘らしい。基督紀元前五百八十二年頃サモスに生まれたピタゴラスは、多年埃及で生活した爲め、其所でイシス (Isis) の秘密教を學び、希臘に歸るや、更にエルシニア秘密教を修め、サモスに一秘密結社を

起さうとした。けれども失敗に終つて、再び伊太利のクロタナに行き、此所で多勢の門弟を集め、そして到頭自分の宗派を打ち建てたと云ふことである。此の宗派の道士は二種に分れ、一つは五箇年の見習期を経て、初めて教師の神秘的な教理に接することを許されるもの、他は最初から、ピタゴラスの總ての教義を闡明する眞の道士より成立つて居る。此の課程は、埃及流儀に倣ひ符牒や像やで、幾何學（是れはピタゴラスが、埃及滞在中に修めたもの）の修得から始まり、それが終ると、最後に靈魂の輪廻とか、宇宙に遍在する唯一神の性質とか云つた深奥な思索に這入るのである。

けれども、ピタゴラスの宗派が、秘密結社の先驅者として、本書の中に取扱はれてゐるのは、單に其れが西部歐羅巴、即ち英國に基礎を据ゑるやうになつてからであつて、實際、英國に於ける初期の共濟組合制 (Freemasonry) は、ピタゴラスに端を發するものと稱され——ピタゴラスは英國に旅行したと云はれて居るか

ら——従つて共濟組合制に、彼の幾何學思想が這入つて居るのも、幾分同様な理由に基因するものと見做されてゐる。

二節。猶太秘密教 (Cabala)。ファブル・ドリヴ (Fabre D'Olivet) の説に依ると、埃及人の總ての知識を學修したモーゼは、イスラエルの教父達によりて傳へられた口碑の一部を、埃及の秘密教から得た。で、舊約全書の、ペンタツコ (モーゼの五書) に現はれてゐる文書と違つた口碑は、本來モーゼから出たのであつて、それは後になつて猶太の律法にも亦た秘密教にも、書き記されたのであると云ふことが、今や多くの猶太研究家によつて唱へられてゐる。

猶太の秘密教が、果して何時の代に出で、又何時カバラ (Cabala) なる名稱 (是れにも Cabala, Kabbalah, Kabalah 等様々な綴字と稱呼がある) によつて、呼ばれるやうになつたかは、多くは言葉争ひに終るものであつて、既に太古から猶太人の間に、神秘的の傳説が行はれたとある限り、残る問題は、單だ何時カバ

ラなる名で、通用するやうになつたかであるが、エデルシャイム (Edersheim) に従へば、カバラ (「受取る」「傳へる」の意) なる語の示す如く、其れは太古から心靈上の傳統として、傳へられたものに違ひないとのことである。

けれども猶太秘密教の思想的方面は、波斯の僧侶や、新プラトン派や、並に新ピタゴラス派等の哲學から、借用したものであるから、今日吾々がカバラとなしてゐるものは、必ずしも純然たる猶太系統のものではないのであつて、此のことは、神秘主義に造詣深きグージノー・ムシウー (Gougenot Mousseaux) も亦是れを認め、カバラには人類の最初の族長から傳來した古い神聖な傳統と、猶太の律法博士によりて甚だしく變造された虚偽なカバラとがあると、斷言してゐるのである。

カバラの説く所に依ると、舊約聖書中の總ての文字は、單だカバラに通達せる人々によりてのみ、解決さるる一つの秘密を包蔵してゐるから、一般の讀者には

到底諒解さるべくもない意味を持つて居る。またカバラの實用的方面は、幾多の魔法や妖術等で以て、萬病を治療することになつて居るが、是等の事柄も、敢て必ずしも猶太人の案出にかかるとはなくて、却つて其の源をカルデアに發するものらしい。其の外、總ての猶太律法やカバラの記録の基本となつて居る「選ばれた民族」論の主張の如きも、古代の埃及人も亦同様に、自らを「神々の寵愛せる民族」と信じた所から察すると、是れも純然たる猶太人のみの專賣特許品ではないようだ。

とは云ふものの、斯う云つた信仰を、神の特別寵愛とまで、僭稱して憚らなかつたのは、確に猶太人だけであつて、彼等の主張する所に依ると、舊約聖書に、エポバが人間を作つたとあるのは、エポバが、イスラエル人 (即ち猶太民族) を作つたと云ふ意味であり、又「心靈を持つてゐるのは、猶太人だけであるから、従つて神に象つて作られた人間は、猶太人のみである」。そして猶太人以外の世

界の民族は總て人間にあらざる、毒氣を含んだ不必要な悪魔であるから、斯くの如き禍は、一日も早く此の世から除き去らなければならぬと。

總ての他民族に對する斯うした排他的の態度と調子とを、合せて現はしたのがカバラの主要題目たる救世主出現の思想であつて、是れは勿論純然たる猶太人の感興を、惹くに足るものではあるが、然し此の思想の本源は、必ずしも猶太人にあつたのではない。何となればドラク (J. B. Drach) も云ふてゐるやうに、「墮落した人類の解放者たり、且つ教師たる神人が出現するであらうと云ふ傳説は、地球上總ての開明民族の間に、絶えず行はれて居つた」からである。

三節。救世主の出現。三位一體の觀念とか、奇蹟的な誕生とか、並に神人の虐殺等、多くの原始基督教々理は、多くの場合、基督物語を以て、單に古めかしい口碑を、新しく翻案せるものに過ぎないといふ論據に、利用しようとする人々があるけれども、基督が此の地上に出現したと云ふことは、歴史上今や隠れも

ない事實となつて居るのである。

所で、基督の生涯に於ける或種の事情に、全然秘密めいた所がなかつたかと云ふに、必ずしも然うではなく、現に古代の傳説に執着した人々にとつては、基督は遠い／＼昔から、言ひ傳へられた豫言を充たすもののやうに現はれ、斯くて賢人達も、ベツレヘムの此の嬰兒を崇めようとして遠方から來たり、又斯くて彼等が東の空に、神の星を眺めた時には、非常に悦びもしたのであつた。がいよく現はれて、彼の誕生がイステエルの偉い人々や、高僧や、學者達のためではなく却つて羊を番する貧しい牧者達のためであることが判つて、彼等の失望は譬ふるにもものなき有様であつた。

殊に平素自らを以て、神の寵兒であり、人類の王であると、自惚れてゐた一般猶太人や、律法博士達にとりては、其の絶望尙ほ更らであつて、折角自分達のみの願ひを満たす救主と思ひ込んだものが、今や却つて自分達に背いて、賤しいも

の、貧しいものの總てに、神の御恵みを與へようとするに及んで、絶望は懸がて一變して憎惡となつたのも固より無理はない。此の間の消息を解するに非ずんば主イエスに對する學者やパリサイ（猶太古代の一宗派にて極端に傳説と形式を重んずるもの）の徒の反感や、並に彼等に對してイエスが漏して居る非難やを、正當に判斷することは出来ないのである。

基督の方で「あゝ汝等禍なるかな、偽善なる學者とパリサイの人よ、そは汝等天國を人の前に閉ぢて自らも入らず、且つ入らんとする者の入るを許さないからである。あゝ汝等禍なるかな、偽善なる學者とパリサイの人よ、汝等は白く塗りたる墓に似たり。外は美しく見ゆれども、内は骸骨と様々な汚穢ケガレに充つ。斯くの如く汝等も亦外は義ただしく見ゆれども、内は偽善と不法に充つ」と熱罵を浴せると彼等も亦負けては居ず、是れに應じてと云はうよりは寧ろ一層の宿怨的反感を以て、其のタルマツド（猶太の律法）で、基督を「あんな奴」とか、「馬鹿」とか

癩病患者とか、乃至は「イスラエルの裏切り者」などと罵倒した上に、彼の奇蹟をも、魔術であり、手品であると貶してゐるのである。

四節。エッセン教（Essenes）。爾來基督教と猶太民族との間柄は、倍々悪化するばかりで、聊も緩和されようとする形勢はなかつたのみならず、近代に至りても、猶太人の主なる目的は、何とかして基督教にケチを付けよう、そして基督の神性を臺なしにして是れに對する世人の信仰を、滅茶苦茶にしようとするにあつた。それで、彼等が基督教に對し、第一に採つた手段は、基督を以て、其の誕生以前、既にバレスタインに存在した、總ての財産を有する禁慾主義者の一團たる、エッセン派に屬したと證明することであつた。

猶太系統の著述家は、概ね此の説を支持し、特にグレーツ（Graetz）の如き、ギンスブルグ（Ginsburg）博士の如き、其の尤なるものであつて、彼等は基督教を以て、エッセン教の一分派に過ぎないものとさへ主張してゐるけれども、予輩を

して云はしむれば、福音書の那邊にも、エツセン教と共通した點は、殆ど見當らぬのである。

ギンスブルグ博士は、「エツセン教徒が、總ての物を共有し、且つ共有の金庫を管理せしむるために、同僚の一人を任命した」ことを指摘して、原始基督教徒も亦斯くの如くであつたとし、是れを證明するために、使徒行傳二章四十四節、四十五節、同じく四章三十二節、乃至三十五節、並に約翰傳十二章六節、十三章二十九節を擧げて居るのである。いかにも基督の死後、原始基督教徒が共有財産的一團を、形造つたことは、事實であるけれども、然も基督と彼の使徒は、決して其のやうなものの痕跡をも示してゐないのである。實際を云ふと猶太の秘密カベ神カベこそ、却つてエツセン教と多くの共通點を有して居るのであつて、高級の秘密教徒は、殆ど悉くエツセン教徒だつたのである。

五節。諾斯士教ノスタシズム (Gnostics)。基督教の中に、初めて一派を立てた思想の流

れは、一般に、諾斯士教として知られて居る諸宗派の一團であつて、此の派の宗旨は、永久の眞理を探索することによつて、信仰を補ひ、斯くして往古の諸信仰と、基督教とを連結することにより、是れに一層廣い意味を與へようとするものであるから、其の理想とする所は、總ゆる民族の宗教を打つて一丸とした、云はば一種の普遍的宗教の確立にあつたのである。

所で、諾斯士教は其の初め、シリア及びパレスタインに産聲を擧げ、アレキサンドリアを中心として發達し、此の地で漸く基督教と接觸したものに過ぎないから、何人も認めてゐるやうに、其の創始者はシモン・マグス (Simon Magus) と稱する秘密教徒カベたり、且つ歴とした魔術師たる一猶太人であつて、吾々が今日聖書の使徒行傳で讀む、魔術師シモンは即ち其の人である。

斯う云ふ次第であるから、諾斯士教徒が動もすれば基督教の本旨を穿き違へて豫言者イザヤの所謂「惡を善に、善を惡に、又た暗黒を光明に、光明を暗黒に」

捏造し、そして基督教を極めて狹隘なものにしたのも、固より當然のことと云はなければならぬ。

諾斯士教徒を以て、果して秘密結社とすべきか何うかは、疑問であるが、マテ
ー (Mater) は三世紀頃の幾多著述家の言を引用して、彼等に秘密な儀式と、秘
法傳授とがあつたらしいと説き、又た教父達は確に、然うだつたとも斷言して居
る。が、孰れにしても諾斯士教徒は、一種の秘密な教理と、傳統によりて信仰し
そして是れを記號や符牒で、極めて限定されたる一部の人々のみに傳へるもので
あるから、少くとも基督教とは、甚だしく選を異にしたものと云はなければなら
ぬ。

六節。マネス教 (Manichæism) 。 諾斯士教を以て、神秘的教義の假面を被
つた、多少破壊的な目的を有するものとすれば、其の後一世紀を経つて現はれた
マネス教は、尙ほ一層秘密結社の性質を帯びた宗派と見做すことが出来るであら
ぬ。

5.

此の宗派の開祖たるクブリクス (Cubricus) 一名、コルビシウス (Corbicius) は
西歴紀元二百十六年頃バビロニアに生まれ、幼にしてクテシホンの一金満家の寡
婦に、奴隸として買はれ、彼女の死するや回々教の書籍を形見に遺された。彼は
後に到り、一名をマニ (Mani) 或はマネス (Manes) と改め、是等の書籍から得
た知識に、諾斯士教や、基督教や、拜火教や、並に自分自身の思想やを混和して
一種の哲學を築き上げた。世に云ふマネス教は即ち是れである。

此の教義によると、總ての物は絶対に罪惡であつて、罪惡なるもの、獨り永久
的である。人類そのものは、元來、惡魔の子であると説くのである。それで諾斯
士教とマネス教が、何とかして基督教に、痛手を負はせようとしたことは、一點
疑ふの餘地ない事實であつて、それを基督教の教父達も夙に洞察して、彼等を呼
んで異端者となして居るのである。

第二章 回々教に對する陰謀

以上は基督教並に正統猶太教に對して、試みられた諸々の破壊的宗派の大要を述べたものであるが、更に吾々は回々教徒の道德的及び宗教的信念を覆へさせやうとする、極めて有力な諸團體に就いて、一言しなければならぬ。

七世紀の半ば頃になつて、回々教に大きな龜裂を生じ、此の龜裂は遂に公然たる鬭争と化し、是れが爲めにアリー(Ali)は暗殺され、其の長子ハサン(Hasan)はメジナで毒殺され、更に次子フセーン(Husain)もオトマンの一味と、ケルベラで戦ふて戦死をした。が、彼等の死は、今日に至るまで、尙ほ年々シアー派、(Shiaks)の人々によりて追悼されてゐる。

一節。イスメール教派 (Ismaelites)。 シアー派はアリーの繼承問題で、更に

四派に分裂し、その一つが又兩分した。イスメール派と云ふのは、詰りジャファル・アス・サディク (Jafar-as-Sadik) の長子イスメールの門弟一派を稱するのであつて、此の派の信條はマホメットを豫言者の眞の教を傳へる導師であるとなし、且つマホメットは死んだのではなく、時が経てば必ず歸つて來るのであるから回々教徒は彼を待たなければならぬとするにあつた。が、西歴八百七十二年頃に至り、極めて巧妙な陰謀家が此の一派を左右するやうになつて會つては單に分離しやうとする傾向だけしかなかつた此の派も、今や回々教並に其他一切の宗教的信仰を覆へさうとする一つの運動と化して了つたのである。

のみならず、彼等は様々假面を裝ふて、巧に人心を蠱惑し、宗教も將た道德も單に欺瞞とペテンに過ぎないから、是等を顧慮するの必要は毫もない。要は互が、親密に團結して、地上に立派な黄金國を築くにあると主張したから、彼等の勢力なかくに侮り難いものがあつた。

二節。カルマト教派 (Karmathites) 。 カルマト教は、云はばイスメール派の新に發展したものであつて、此の派の教祖カルマトは、何物も信せざる生れながらの陰謀家であつた。彼は先づ亞刺比亞人を甘く丸め込んで、財産も妻も、總て共有にすることの利益を説き、そして彼等の金銭を有るだけ、捲き上げて了つた後で、更に總ゆる女を一夜會堂に集めて、彼等を凡ての男と雜魚寢せしめ、是れを以て友愛と親交の極致となしたのである。

其の上に、カルマトは其の信徒に、掠奪や其他の總ゆる種類の不義を許し、且つ彼等に訓ふるに、祈禱、斷食等一切の儀式に、拘泥する必要なく、又敵の血は流しても罪にならぬとした結果、カルマト教徒は一變して匪徒に化し、斯くて自らに反對するものを掠奪したり、虐殺したりして、近隣地方を全く恐怖に戰慄せしめた。

三節。ファティマイト教派 (Fatimites) 。

此の派の創始者たる導師ウベイ

ダラ (Ubeidallah) は、其の反對者たるアバサイト (Abbasides) の一派から、猶太人の血を承けて居るとして宣傳されて居るけれども、それは信するに足らない。第四世ファティマイト (Fatimite) 教主の治世に、埃及は王權に歸した爲め、程なく「知慧の會」と稱する男女隔週集會がカイローに催された。そして死後神に祀られ、今日でも尙ほドルース人 (Druses) によりて、崇拜されてゐる第六世ハキム (Hakim) 教主の代に至り、それは遂に「知識院」とまで發展して、大に勢力を振ふやうになつた。

が、此の派の説く所は少しく詭辯的若くは辯證的の調子を帯びて居るだけに、其の感化力は前のカルマト派よりも、尙ほ一層大なるものがあるのであつて、斯くて、猶太人を説得するには基督教徒のことを惡しざまに言ひ、基督教徒を手懐けるには、猶太人や回々教徒を、一樣に惡口するといつた鹽梅式であるから、此の教派の要求する所、一つとして聽き容れられないものはない有様であつた。

是れを要するに、此の派の信条も、亦一切の宗教及び道德の原理を破壊して、唯だ自らの大きな野心を遂げることにあつたから、カイローなる本部の指導の下に、一派のものは有りとしある教権や、傳統やを破壊することを以て、自らの使命と信するに至つたのである。

四節。ドルース教派 (Druses)。カイローの恐ろしい秘密本部は久しからずして新しい變態信仰の中心となり、従つて其の創設者たるハキム六世は、イスマール・ダラジ (Ismail Darazi) なる一希臘人によりて、殆ど神と崇めらるるまでに推し上げられた。又た自分でも神の權化だと信じてゐたハキムは、其の後四年を経て、事實自らを神だと宣し、此のことは更に彼の大臣の一人によりて、現實化するに至つた。

けれどもハキムの殘忍な行爲は、痛く埃及人の反感を買ひ、其のために彼は程なく、一隊の不平黨によりて虐殺されたが、死體は彼の娘のために隠匿されて了

つた。傳へ言ふ、神なるハキムは、信徒を試みるために、一時消失したけれども時經つ中に再び現はれて、背教者を罰するだらうと。斯う云ふたわいもないことが、大にダラジの宣揚する所となり、斯くてレバノンのドルース人の信仰する所となつたのである。

吾々は爰で此の奇態な宗教を、詳述してゐる暇はないから、單に其の特長の一端だけを約言するが、ドルース人は瀆神者、志願者及び賢者の三段に別れ、共済組合制に倣ひ、教義は極めて嚴格な秘密封緘の下に、符號や合言葉のみ、漸進的に開示されるのであつて、他宗のものを引つぱり込むには、フアナイマイト派同様に、多少曖昧な態度を持して、巧みに説き伏せ、而して自分の信条を決して未信者には明かさぬのであるから、此の點は共済組合制と、多少、靈犀相通するものがないでもない。

五節。暗殺團 (The Assassins)。ドルース派は他のイスマール派と異なり

ハキムを崇拜して、純然たる宗教的信仰を捧持し、アブデユラ・イブン・メームン (Abdullah ibn Maymun) や、並にカイローの秘密本部等の、無神論的傳統を繼承しなかつた。けれども此の様な傳統は、西歴千九十年に至り、波斯人にして且つ嚴格なシアー (Shiah) 教徒たるハサン・サバ (Hasan Saba) の支持する所となり、其の立場の極めて曖昧であつた爲めに、却つて彼は非常な權謀術數を弄することが出来た。

彼は陽に回々教の教理を信じて、豫言者マホメットのイスメール系統に附屬するものと揚言しつつ、巧に權力にちかづく素地を作り、此の目的を達するためアブデユラ・イブン・メームンと同様な方法を採つたけれども、ハサンの組織した恐るべき暗殺團の威力は、到底彼の先輩などの思ひも寄らぬほどのものであつた。で、「暗殺團史」(The History of the Assassins) の著者フォン・ハムマー (Von Hammer) も彼に就いて、

「元來、意見なるものは手を武装しない限り、唯だ腦髓を混亂させるだけで何の力にもなるものでない。懷疑説と自由思想は懶惰者と哲學者の精神に宿つて居る限り、一の王位をも顛覆せしめ得るものではない。是れを爲すには宗教並に政治的熱狂を國民の手に瀾ませることが何よりも大切だ。人々が何を信じてゐるかは、野心家にとつて何の用をもなさないが、自分の計畫を果たすために人々を何う變じ得るかを知るは、何よりも必要だ」と云ふて居るのである。

ハサンは暗殺團を部署して、大師、副師、密使、組合員、歸依者、教友、並に普通人等の七段に別ち、教旨は何物も信せず、又如何なる手段に訴ふるも敢て構はぬから、唯だ現世の權力を握れば可なり、苟も自分に反對するものは、悉く殺戮して宜しい、とするにあつた。世に眞なるものなく、萬事は許されると云ふのが、此の派の秘密教義の根本をなすものであるが、是れは唯だ二三の人々に教へ

るだけで、他のものは極めて駭めしい信心の假面の下に、一切與り知ることが出来なかつた。

是れを要するに、ハサンの宗派は、伊太利の炭夫組 (Corporari) や、愛蘭の共和友愛團 (Republican Brotherhood) やと同じく、宗教的熱狂に基礎を置いて居る總ての暗殺團の手本となるべきものであつて、従つてカイローの秘密本部の符牒や、記號や、並に秘法傳授やは、歐羅巴の大きな秘密結社の土臺となるものでなければならぬ。所で是れが何うして輸入せられたか、又如何なる徑路を辿りて、是等の東洋思想は基督教諸國に侵入したか、是れを知るには先づ、十字軍の歴史を通讀しなければならぬ。

六節。騎士團 (Templars)。 第一回十字軍が回々教徒の敗北や、アンチノオク及びジェルサレムの占領やと同時に引上げてから、十九年を経て千百十八年に、九名の佛國紳士より成る一團が、聖墓の巡禮者を保護するために、騎士團を

組織した。恰も其の時ゼルサレムの王位に即いたポルドキン二世が、ソロモンの寺院近くに、一軒の家を建てて彼等に呈した所から、爾來「寺院の騎士」なる名で呼ばれるやうになつたのである。

千百二十八年に至り、騎士團は佛國トロイエ市の參事會、並に羅馬法王の認可する所となり、尋いでセント・ベルナードの起草した規定により、騎士團員は總ての貧窮、清廉、服従の宣誓を爲すことになつて、暫くの間は幾多の勇ましい篤行に一方ならず世の賞讃を博したとは云ふものの、何分にも義捐金だけで生活すると云ふ規則が、彼等に累をなし、最初の微細な布施はやがて莫大な寄附金となり、斯くて貧困を本領とする彼等は、十二世紀の末葉に到り、非常に富裕な一團體となり、其の勢力殆ど全歐洲を蔽ふやうになつたのである。

騎士團は其の初めの趣旨に従ひ、ハサンの暗殺團とも闘ふて居つた。千百五十二年暗殺團のものが、トリポリの郡主レーモンド (Raymond) を虐殺するに及

び、騎士團は彼等の領地に侵入し、彼等を強要して、贖罪金年々一萬二千金貨を支拂ふ契約に、調印せしめたほどであるけれども、何時の間にか兩者の間に默契が成り立ち、其の惡徳非行に於て、今や孰れを何れと判別が付かないやうになり騎士の團名は、恰も亂暴者若くは自墮落者の異名のやうになつたのである。

佛蘭西の王フィリップ・ル・ベル (Philippe le Bel) は從來騎士團の友人であつたが、今や自らも彼等に對し、警戒すると同時に、又羅馬法王を説いて、彼等に對し、懲罰を加へしめようとしたが、法王が此の事を詮議するに先だち、千三百七年十月王は佛蘭西に於ける總ての騎士團員を逮捕し、左の罪名により、佛蘭西宗教裁判官をして是れを取調べさせた。

- 一、騎士團に加入する際に、十字架を侮辱したり、基督を否認したり、且つ非常に淫猥な儀式を行ふこと。
- 二、眞の神の像と云ふて、偶像を崇めること。

三、法會に神聖な語を省略すること。

四、宗教ならざる首長が罪を赦す權利を有すと僭稱すること。

五、天理に背く罪惡を許可すること。

是等の汚名に對し、ジャク・ドウ・モレー (Jacques du Molay) 以下多數の騎士團が、殆ど一言の異議もなく、承服したのを以て、容易に彼等の日常を推察することが出来るであらう。

果して然らば騎士團は異端者であつたかと云ふに、是れに就いては色々の異見がある。ウイルク (Wilcke) や、ランケ (Ranke) や、並にウエーバー (Weber) 等は、彼等を以て回々教の唯一神教徒であるとし、ルクートウ・ドウ・カントルウ (Leconteux de Cantelou) は彼等の一人が、バレストアインに居る時、レバノン山の洞窟で、暗殺團の大師ハサンから、秘法傳授を受けたと語つてゐる。兩者の間に、多少の類似點が存するのは、事實であるけれども、然し騎士團の秘密教義

を以つて、暗殺團や、或は其他のイスマリ教派等から、來たものとする事は、何うしても受け取れない見解である。

又ロアズルール (Loisleur) は彼等の思想を以て、諾斯士教若くはマネス教から出たものとし、更に共濟組合員たるラীগン (Ragon) は東洋の道士から、使徒約翰ヨハネに屬する、或種の猶太思想を學んだ爲めに、彼得ペテロの宗教を、排斥したのだらうと主張して居る。エリファス・レヴィ (Elephas Levi) も亦同様な意見を述べてゐるが、何れにもせよ、彼等の神は基督教の神と、殆んど全く兩立しないものであつて、それは寧ろ基督教を捏造して、惡魔主義たらしめようとするものである。

第二章 惡魔主義と煉丹方士派

以上述べたる事柄を綜合すれば、往古の秘密教派には、宗教的及び政治的の、凡そ二つの目的があつたやうであつて、マネス派や、初期のイスマリ派等は主として前者に屬し、後期のイスマリ派や、ファティマイト派や、カルマト派並に騎士團等は宗教的儀式に加ふるに、政治的の支配慾までをも持つてゐたやうである而して此のような二重的傳統は、今日に至るまでも總ゆる秘密結社の中心思想として、遵奉されて居るらしい。

嚴密な意味での秘密結社とは云へないまでも、アルビゼンス派 (Albigense) は秘密結社制に倣ひ、其の會員を道士と半道士とに區別し、前者は極めて少數の人々から成り、外觀上肉食を斷ち、虚言や誓言を忌む峻嚴な生活を送つて居るらしいが、それは單に表面だけのことで、一皮剝ぐと、教派中大多數を占むるクルダクルダン人 (Ordens) の尊敬を得たいばかりとあつては、全く鼻持もならぬ次第であつて、又此のクルダクルダン人と云ふのが、詐欺、強奪、偽證、暴利等、凡そ罪惡と名

の付くものは、何でも爲さざるなき無類の悪徒ぞろひであるが、それでゐて、マ
ネス教に由る救ひを、彼等の先輩達から得ようとして、此の派に留まつて居るの
である。

一節。悪魔主義 (Satanism)。十四世紀の初めに當りて、アルピゼンス派の
異端的行爲よりも遙に恐るべき、魔法妖術を常職とする一團が現はれた。是れを
稱して悪魔主義となすのであつて、其の神髓とする所は、神聖の汚辱と破壊にあ
る。

エリファス・レヴィの言ふてゐるやうに、地獄を喚び出すには「人の信奉する
宗教の儀式を汚濁し、且つ其の最も神聖な象徴を、足蹴にすることが、必要であ
つて」、悪魔主義の斯うした思想は、聖餐禮の神聖を汚辱することによりて、正
に其の極致に達してゐるものと云はなければならぬ。

罪惡の禮讚は、此の派の年中行事となつて居るものであつて、其の好んで採用

する不吉な魔法は、要するに人間の意志を永久的に混惑させ、そして生きた人間
の中に、悪魔の残忍な幻影を實現させるのが目的で、聖物褻瀆と虐殺とを併せ行
ふものに過ぎない。それで正當に云ふと、「其れは悪魔の宗教であり、暗黒の崇
拜であり、そして殆ど病的程度にまで善行を憎むものであつて、此の派を稱して
死と永遠の地獄を體現せるものであると云つても、誰か是れを咎めやう」とは、
是れ亦レヴィの言である。

二節。煉丹方士派 (Rosicrucians)。魔術と云ふと、世間では直に巫術(死
者と語りて、未來を占ふ術)と早合點をするが、十六七世紀に於ける秘密教の魔
法は、必ずしも然うではない。即ち此の時代に於ける魔法若しくは魔術なる語は
多くの意味を包括し、煉丹方士派の英人ロバート・フラッド (Robert Fludd) は
是れを「自然魔術」(自然物から不思議な力を抽き取る物理学の深奥な一部門、
即ち煉金術の如き)、「數理魔術」(技術家をして幾何學的知識で驚くべき機械な

どを造らしめる術)、「有毒魔術」(毒藥などを調合する術)となして居るが、斯くの如きは、現今では既に科學の領内に這入つて居るから、最早や魔術など云はるべき筋合のものではない。

フラツドは更に巫術 (Neuronomy) を分類して、是れを (一) 惡靈的 (Goetic) (死者の靈を喚び起したり、惡靈と語つたりする術)、(二) 惡意的 (Maleficent) (神徳によりて惡魔を鎮定させる術)、(三) 妖術的 (Theurgic) (神の意志で行はれるが、然し其の實は神の名を假る惡魔が、様々な奇蹟を演ずるもの)、(四) 奇術的 (Thaumaturgic) (幾多の幻覺的な現象を生ずるもの)、(五) 天體的 (Celestial) (天體の運行を察する知識即ち占星術の如き) 等の諸魔術となしてゐるが、是れまで本書中に述べ來りたる魔術なるものは、多くは妖術の部類に屬するものなのである。

けれども、其の後自然界の隠れた力を取扱ふ、現代の科學的研究に近い所謂、

「煉丹方士派」なる一つの運動が、徐々に發達したのであつて、其の始祖とも云ふべきは、普通にパラセルサス (Paracelsus) として知られて居る獨逸醫師の子、テオフラストス・ボムバストス・フォン・ホーヘンハイム (Theophrastus Bombastus von Hohenheim) 其の人である。彼は千四百九十三年頃に生まれ、東洋を旅行した際に、秘密教に關する或種の知識を得て、是れを其の後、疾病治療法に應用したと云ふことであつて、彼の思想は、確に猶太秘密教と、同じ本源から出たものには違ひないにしても、而も彼は必ずしも秘密教徒ではなく、一個の獨立した思想家若くは科學者として始終し、別に秘密結社に加入したらしい形跡もない。

煉丹方士派は云はば、猶太秘密教とパラセルサスの教理とを、折衷した結果とも言へるのであつて、其の本質を指摘すれば、飽くまでも基督教的信仰の上に立つ、有識者の團體と評することが出来るであらう。人或は是れを以て、往時の騎士團と、密接な關係を有するものやうに、説くものもあるが、それは間違つて

居る。ミラボーの述べてゐるやうに、煉丹方士派は一種の神秘的、宗教的並に魔術的の宗派に外ならぬ。

又た十八世紀に於けるやうに、今日でも此の名稱を、多くの違つた目的並に教理を有する諸團體に適用してゐる。是等の結社で、初めて英國に創設されたものは、外國の旨を受けて千八百六十七年、ロバート・ウエントワース・リトル(Robert Wentworth Little)によつて設立された「英國煉丹方士團」であつて、是れに入會を許されたものは、唯だ非難のない共濟組合の頭分のみであつた。

其の宗旨とする所は、政治的でもなければ、或は非基督教的でもなく、却つて——多少の自家撞着ないでもないが——基督教的の要素を加味し、且つ基督教的の煉丹方士團から出たと稱しながら、而も自然力や煉金術やを取扱ふに於て、多く猶太秘密教的であつたから、固より魔性のものであることは云ふまでもない。それで入會志望者を許すにも、先づ聖壇に導いて、爰で秘密を守ると云ふ宣誓を

強制的になさしめ、萬一是れに違反する時は、放逐されるか、或は意志不隨のため中風になるか、死するかの罰を受けなければならぬと嚇したものである。

斯う云ふ得體の知れの團體であるから、其の畫策し若くは活動する所は、素より多く後ろ暗いことばかりであつて、或時は獨逸に味方したり、又た或時は愛蘭の急進側に加擔したりして、何時も風なきに波を上げ、事なきに捫着を起すことを是れ能事とし、斯くて世界を戦亂の巷と化さしめて、其の虚に乗じ、自分等の慾望を満たさうとするのである。

多年或る秘密團體に屬して居つた、一受傳者の意見に依ると、クンダリニ(Kundalini)と稱して此の一派に使用されてゐる原動力も、實は性の力を包括せる單なる電磁力に過ぎないので、云はば催眠術と暗示の極めて老獪な手段を以て彼等は巧に人心を操るのであると。それで此の團體の儀式なども、全く催眠術式であつて、先づ暗示を與へて、必要な精神的の幻妙な雰圍氣を作つて置いてから

そろそろ會員を施術者たる幹部の意の儘に左右するために、催眠術をかけたさうである。

第四章 共濟組合

一節・共濟組合 (Freemasonry) の起原。 「共濟組合の起原は、單に共濟組合員だけに知られることだ」とは、十八世紀時代の一著者が述べて居る言であるが、成程、蛇の道は蛇とやら、此の問題を最も能く解するものは、組合員そのものでなければならぬにしても、而も組合員以外に、此の問題が全然解けぬと云ふ理窟はない。

加之に、燈臺下暗しの譬に洩れず、組合員にして却つて組合の歴史に暗いものもあり、又た組合の外に超然たる學者にして、是れに精通してゐるものも少くな

い。が、奈何せん諸説區々に別れ、一向に適從する所を知らぬ有様である。けれども大略是れを、左の十二説に別つことが出来るであらう。

- (一) (猶太史の) ヤコブの十二子からとするもの。
- (二) 異教徒の秘密教からとするもの。
- (三) ソロモンの寺院の建築からとするもの。
- (四) 十字軍からとするもの。
- (五) 騎士團からとするもの。
- (六) 羅馬派の工匠からとするもの。
- (七) 中世紀の石工組合 (Operative Masons) からとするもの。
- (八) 十六世の煉丹方士團からとするもの。
- (九) オリヴァ・クロムウエルからとするもの。
- (十) チャールス・スタアート王の政治上の目的からとするもの。

(十一) セント・ポールの寺院建築の際、サー・クリストファー・レン (Sir Christopher Wren) からとするもの。

(十二) 千七百十七年デサグリエルス (Desaguliers) 博士及び其の友人達からとするもの。

等であるが、是れ等の何れかの一つを以て、直に共済組合制の起原と見做さうとするものがあるれば、それは非常な見當違ひである。實際を云ふと、近代の共済組合制は二種の特異な傳統、即ち建築の技術たる作業的の石工術と、生と死の大きな真理の上に立つ思索的の理論とが、混淆した、云はば二重の系統から成立つて居るものであつて、有名な共済組合員たるゴブル・ダルヴェイエラ伯 (Count Goblet D'Alviella) が言ふてゐるやうに、共済組合制は中世紀の石工組合と、哲學者の秘密團體とが有効に結合して、前者は形を興へ、後者は心を點じたるものにならない。

で、上に掲げた十二説は、皆なそれぞれに共済組合制の起原を説くに、與つて大に力あるものであつて、即ち作業共済組合制は、端を羅馬派の工匠に發して、中世紀の石匠組合を経て今日に到り、思索共済組合はヤコブの十二子、並に異教徒たる秘密教から由來せるものであるが、此の間に、猶太秘密教の要素が、加味せられて居ることは、固より疑ふの餘地もない。所で、是れが、英國に普く行はれるやうになつたに就いては、それは工匠の羅馬派によつて傳へられたものであるか、或は騎士團によつてであるか、煉丹方士團によつてであるか、それとも亦た往時殆ど總ての共済組合を背後から操つて居つた十七八世紀の猶太人により、傳へられたのであるか、此の邊のことは今以て不明である。

が、兎に角千七百十七年に初めて、共済組合制度の儀式及び憲法が起草された時分に、古代の埃及並にピタゴラスの教理の幾分が、保存されて居つたことは、固より云ふまでもないことであるが、是れと同時に、又た猶太系統秘密の教義が

少なからず採用されたことも、想像するに決して難くない。

二節、現代の共済組合。多くの人は總ての共済組合を以て、共通の信仰を有し、且つ共通目的のために活動するものと、考へて居るらしいけれども、それは非常に間違つて居る。パウル・ヌリソン (Paul Nourisson) 氏も云ふて居るやうに、世に普遍的の共済組合制なるものなく、國家の異なるに従つて、共済組合制も亦た異ると云へよう。が、概して云ふと、現代の共済組合制は、英帝國、亞米利加、和蘭、瑞西等に行はれて居るものと、巴里の本部を中心として、多く舊教諸國に行はれて居るものとの、二種に區別することが出来るであらう。

三節。歐洲大陸の共済組合。概して云ふと、新教諸國の共済組合は、革命的でもなければ、將た非宗教的でもなく、却つて多くの場合、新しい共済組合制とシツくり合致してゐる觀ないでもないが、之れに反し、舊教諸國の共済組合は事毎に教會と國家に、楯を突くやうな態度を採つてゐるらしい。其の正邪曲直孰

れの側にあるにもせよ、つまり斯くの如きは共済組合制に、二種の截然たる區劃があることを示すものであつて、此の點に於て、英國の共済組合と佛國の其れとは特に顯著な對照をなすもののやうである。

千八百九十年に佛國共済組合員フェルナン・モーリス (Fernand Maurice) は公言して、「共済組合の隠れた行動がなくなれば、佛國內に何事も起らないだらう。又た若し共済組合員が一たび結束をすれば、十年以内に何人も、佛國內で吾々を外にして、行動することは出来なからう」と空嘯いて居るが、是れは云ふまでもなく、教會と政治に對抗し得る共済組合の威力を語るものだ。其の上に、佛蘭西の共済組合は、單に政治的たるばかりでなく、又政治的の破壊目的を有するものでもあつて、英國の共済組合が、何所までも「友愛」と「救済」と「眞實」との三理想を追求してゐるに反し、佛蘭西のそれは飽くまでも、「自由」と「平等」と「友誼」との革命的鯨波を、其のモットウとして居る。それでラーゴン (Ragon)

も云ふて居るやうに、「共済組合が何時も佛蘭西人に持て囃されるのは、平等を法則とするからであつて、平等が眞に各共済組合支部に存する限り、共済組合制は佛國に滅びないだらう」と。

又た彼は斯うも云ふて居るのである。「一切の社會改革、並に其れから得る一切の社會利益は、共済組合が是れを支持するからこそ、存続するのであつて、此の現象は單に、其の組織力のみによるのではなく、過去も共済組合のものであつたが、將來とても其れを免れることは出来ないだらう。ヂョネーや、サン・シモンや、オウエンや、フリエー等によりて認められた偉大な美はしい社會統一を、生産的共同によりて實現し得るのは、單だ共済組合の大きな組織力を借るの外はない。共済組合員にして是れを望めば、是等の博愛的思想家等の思想も、無駄な空想にはならないで済むだらう」と、是れで觀れば、佛國共済組合本部の目的は確に國際社會主義者の其れと彷彿たるものであつて、クラヴエル (Clavel) の云

ふて居るやうに「其の企てて居る大きな事業は、人類の間に、皮膚の色や、階級や、信仰や、意見や、並に國家やの區別を撤廢して、全人類を愛情と献身と仕事と知識とで、結び付けた同一家族たらしめることにある」。

是れだけは英國の共済組合も、亦た全然其の志を同じうするものであるが、唯だ是れを達成する手段に於て、英國の共済組合は、現在の社會制度や、政治様式やに干渉することなく、主として自分自身を改善しようとするに反し、佛國若くは其他の舊教國の共済組合は、天啓派の感化を受けて、先づ社會改造を以て、第一歩としようとする點で、非常な差異がある。宗教に對する兩者の態度も亦た同然で、前者が宗教の信仰を必要とし、「良心の自由とは、決して無神論の意味ではないから、一切の共済組合員は、それぞれに或種の宗教を信仰しなければならぬ」として居るのに反し、佛國系統の共済組合は、總ての様式の宗教を排斥し、特に加特力教を以て、不俱戴天の敵となして居るのである。

斯う云ふ譯であるから、伊太利、白耳義、西班牙並に葡萄牙等に於ける頻々たる血腥き暗殺沙汰や、革命騒ぎやは、其の裏面に多く共済組合員が控へて居るのであつて、例へば千九百十年から二十一年に亘れる葡萄牙革命の如き、西班牙王暗殺の陰謀の如き、千九百十八年葡萄牙大統領ベイス (Paes) 氏の暗殺の如き、千九百二十一年アントニオ・グランジョ (Antonio Granjo) 博士の暗殺の如き、總て是れ佛國の共済組合本部と、何等かの關係を有するものの仕業だつたのである。伊太利に於ける共済組合は、フアシス黨と正反對の決議をした爲め、目下の所、ムツソリーの大眼玉で睨まれて、喞の音も出ない有様であるけれども、而も其の隠れた手は、青年土耳其の上にも及び、先年ケマル・ムスタフが甘々として成功したのも、實はサロニカ共済組合支部の御蔭であると云はれて居る。

が、孰れかと云ふと、葡萄牙及び西班牙等の共済組合が、無政府主義的色彩を帯びてゐるに反し、歐洲の東部のそれは、多く猶太人の勢力下にあつて、マルク

ス社會主義を奉じて居るやうであつて、倍々東進するに従ひ、漸次國際社會主義の面影を脱して、政治的並に民族主義的の性質を含み、土耳其、埃及及びシリア等に到ると、恰も一千年以前に、騎士團が固めたと同様な秘密結社が、今尙ほ儼然として存在せることを發見するであらう。

四節。英國の共済組合。英國の共済組合が佛國のそれと異なる點は、上でも大略は述べたが、更に其の二三の特長を極めて簡単に摘記すると、第一に、兩者等級を同じうしながら、而も儀式、禮法、信條、言語及び符牒の解釋を異にして居ると云ふこと、第二に、佛國の方は入會者を指導するに、極めて陰晦な儀式によりて、本人には殆ど全く不可解なことを訓へるに反し、英國の共済組合は、最初から一定してゐる組合の秘法を、徐々に傳授するから、極めて公明正大な制度であると云ふこと、第三に、英國の共済組合は本來博愛的であつて、それが慈善目的のために寄附した金額は少くなく、歐洲大戰以來、三つの主なる共済組合慈

善團が集めた高でも、年々三十萬磅以上であつたと云ふこと等、是れである。

が、爰で特に吾々が強調したい點は、英國の共濟組合は、單に理論上ばかりでなく、實際上に於ても、嚴に非政治的たるを以て主義とし、此の主義を總ゆる機會に標榜したことであつて、現に最近の總選舉前にも、共濟組合の本部は「永い間に築き上げられた傳統に基づき、共濟組合の會合で、苟も政治問題に關する議論は、一切差控へる旨」の布令を發して居るほどである。

それから宗教に對しても、佛蘭西の共濟組合は、總ての宗教を排斥して、單に人間性のみを神と崇めるため、却つて人間進歩の唯一の目標を撤去することになり、又た社會主義を支持するため、折角自らの主張する一切の階級並に境遇の人々間に、友愛よりは却つて階級戰爭を助長させる傾きがないでもないが、是れに反し英國の共濟組合は、前にも一寸暗示せるやうに、單に宗教を尊重するばかりでなく、又た愛國心をも大に獎勵するものであるから、前者を社會の破壊要素と

すれば、後者は當に社會革命の安全瓣とも見做すべきものであらう。従つて現在の儘の英國共濟組合を攻撃するのは、國家の利益と全く相背馳するものと云はなければならぬ。共濟組合員は些細なことでも、秘密を守り、そして法律上服従するの義務もない長上者に悦んで服従し、且つ團結心強烈にして、同僚と共同目的を達するため、水火をも厭はないと云ふので以て、天啓團以來多くの秘密團體は、其の新入者を何時も正規な共濟組合に求めたが、英國の共濟組合は、此等の團體が多くの婦人をも入會させ、且つ大體に於て、主義が違ふと云ふ理由を以て組合員の何れに加入することを禁じた。と云ふのは、英國共濟組合本部の規定に依れば、「英國領域内で活動する一切の組合員は、女子を會員とする共濟組合なるものに、出席し又は參加することを禁ず」と云ふことになつて居るからである。けれども、然う云つた女子混合の變則的な秘密結社が、此の時分勃然として出現した。

目的のために、人々を秘密に結合せしむる制度が、倫敦の共済組合本部で再定されたのは、確かに煉丹方士團の出現に、刺戟されたものに違ひない。所で此の様な内外多端の十七世紀に於て、——即ちルーテル派が羅馬法王に對抗して團結したり、舊教徒が新教徒の侵入に備へるため、軍勢を糾合したり、共和黨がクロムウェルに味方して陰謀をたくらむたり、又勤王黨はスツアード家を再興しようとして計畫を廻らしてゐるかと思ふと、今度は何れの王家を仰ぐかと云ふことに就いて猛烈な内輪争ひをしたりなどして居つた、實に鼎の沸くがやうな此の世紀に於て——何うして此の種の組織が成立し、そして幾多の人々が、或主義のために秘密の中に、活動することが出来たかと云ふことを考へて見ると、興味の自ら津々として湧き起るものがある。

共済組合制が初めて一定の基礎の上に立つたのは、前にも述べた通り、千七百

十七年であるが、爾來、それは幾多の變形を受け、後になりて、作業的の方面は甚だしく縮少され、遂には中産並に上流階級の純然たる思想團體たるに至つた。斯う云ふ大變革は、倫敦に四つの支部を設けた時分から、既に萌して居つた徴候だつたのであつて、其の爲めに、組合の牛耳を握つてゐるものは、單に中産階級出身者ばかりで、石匠とか建築家などは、僅に員に備はるのみであつた。

所で、既に思想的若くは少くとも半ば思想的の團體となるに至つた倫敦の共済組合員が、何うして急に本部を設け、且つ儀式的に、憲法まで制定する必要に迫られたのであるかと云ふに、彼等をして爰に至らしめたには、大に曰くがある。次ぎに少しく其の事情を述べて讀者の一察に供しよう。

元來、共済組合制なるものは、苟も自らを模範とするものでさへあれば、縦へ如何なる主義でも、陰謀でも、或は單なる座興でも、何れにも利用される組織であつた。が孰れかと云ふと、其れは近來動もすれば、政治的陰謀家のために悪用

され、斯くて多くの場合、國民の平和を擾亂することのみ多かつた。そこで平和を好愛する倫敦人は、何とかして是れを、政治的陰謀家の手より挽ぎ取つて、其の本來の「友愛的精神」に立ち返らしめようとし、それには、勞働者たる石匠ばかりも面白くないから、總らゆる階級と職業の人々を、網羅しなければならぬと云ふので、爰にいよいよ本部を設け、且つ儀式や憲法をも制定して、新しい基礎の上に、是れを置かうとしたのが、抑もの理由であつた。

ニコライ (Nicolai) の説によると、此の種の平和的目的は、既にサー・クリストファー・レン (Sir Christopher Wren) の大統時代から、英國共済組合員の心を喚起し「何とかしてゼームス二世以來の英國に於ける、恐ろしい宗教的反感を緩和せしめて、宗教や、位階や、利害關係等の相異から起る、敵意を出来るだけ弱めて、或種の和諧と友愛を誘發するように努めたいと云ふ希望が、既に此の時分から存した」さうである。

又た宗教についても、共済組合内の同志は、千七百二十三年最初の憲法を規定して、「共済組合員は道徳法に従はなければならぬ、又た苟も彼にして技術を理解する限り、彼は決して愚かな無神論者たり、或は非宗教的の放埒者であつてはならぬ」としてゐる所から察するに、共済組合員は必ずしも不逞犖猛な無神論者と、同一視すべきものではない。が、それが偶々民心を激昂させることのあるのは、全く秘密を是れ能事とするからである。

千七百二十四年に早くも「共済組合員の大秘密發覺したり」(The Grand mystery of the Freemasons Discovered) と云ふ表題の本が發行されて、組合員の激怒を買ひ、又た其の後佛國で秘密結社に對する法令が議會を通過するや、此の時「ザシン」と署名した一文が紳士評論誌上に發表されて、「最近、佛蘭西及び波蘭で禁遏された共済組合なるものは、人類の危険な一要素であるから、友情とか親愛など云ふ口實の下で、國家に對し、陰謀を目論むやうな、斯くの如き秘密集

團を、政府は斷じて默許すべきでない」旨を論じてゐるのも、畢竟するに、共済組合制が暗黒な方面を持つて居るからであらう。

倫敦に於ける秘密本部の設立に尋いで歐洲大陸の諸地方でも、即ち千七百二十一年には白耳義のモンに、同二十七年には巴里に、二十八年にはマドリッドに、三十一年にはヘーグに、三十三年にはハンブルグ等各地に、共済組合支部の設置を見るに至つたのであつて、是等の支部は何れも、倫敦本部から認可を受けたのであつたが、唯だ獨り巴里の共済組合支部だけは、千七百四十三年に至つて、始めて認可を受けた。而して倫敦の組合員が出来るだけ政治的色彩を脱して純真な友愛の濃かな情味に浸らうとして居つたに反し、巴里の其れは初めからジャコビン派の首領が參加して、頻りにスツアード家の再興を書するのであつた。

第五章 獨逸の騎士團主義と佛國の天啓團主義

千七百三十八年の頃であつたが、暫くゾオルテールと交通して居つた普魯西の皇太子フレデリック、後の大王は、是れまで自分が「子供の遊戯」として、齒牙にもかけなかつた共済組合制の秘密を、急に知りたいやうな氣になり、そこでブルンスウィック街を通る間に、八月十四日と十五日の夜間、匆々に秘法の傳授を受けた。彼が斯うした豹變的態度を探るに至つたには、何か異常な思惑があつたに違ひない。然るにフレデリック大王の傳記を書いたカーライルは、此の事を極めて微細な一挿話として、事もなげに片づけてゐるが、是れにも或る事情の潜んでゐたことが後で知れた。

兎に角フレデリックは、王位に即いてからも、共済組合に對し、決して冷淡ではなかつた。彼は躬親しくシャーロットテンブルグの支部を主宰すると共に、其の二兄弟や、義弟及びホルスタイン、ベック (Holstein-Beck) のフレデリック公爵をも、是れに加盟せしめ、更にビールフェルド男爵 (Bielfeld) 及び樞密顧問ヨル

43
22
11

ダン (Jordan) をして、伯林に一支部を設置せしめたから、千七百四十六年まで十四以上の支部が、其の管下に屬するやうになつた。

フレデリック大王即位の年、即ち千七百四十年にヴオルテールは、王の切なる懇望により、初めて獨逸に到り王を訪れた。ヴオルテールは此の時未だ共済組合に加盟してゐなかつたと見えて、千七百七十八年に至り、漸く巴里の支部に這入つたが、彼の獨逸滞留中、二つの著しい出來事が、佛國の共済組合界に相次いで起つた。其の一つは、組合員間に位階が殖れたことであり、他はフォン・マルシヤル (Von Marschall) が獨逸の共済組合を代表して巴里に到り、さうして騎士團制の新しい——と云ふよりも寧ろ復活した——^{オランダ}體制を持つてシヤール・エドワール (Charles Edward) 皇子及び其の從者の氣を惹かうとしたことであつた。

斯う云ふ譯で、當時の獨逸と佛蘭西の間には、精神的に可なりの交渉があつたが、それと云ふのも、實はアンドルウ・ラムゼー (Andrew Ramsay) なる佛國の

一騎士が、共済組合制と騎士團との關係を述ぶるのを、フレデリックが窃に聞いて我の陰謀を達成せしむるもの、共済組合を措いて他になしと感づき、爰に心機一轉して、ブルンスキツクに於ける例の秘密結社加盟となつたことに、全く端を發せるものに違ひない。

扱ていよく秘密結社には加盟したが、此の中で幅を利かすには、何よりも卓絶した知識を持つて居ることが必要だ。此の點に於て再びフレデリックの心に浮んだものは、ウォルテールを參謀としようとのことであつた。古代並に中古史に精通すること彼の如く、又加特力教會を憎んで、其の信仰を破壊するために、非常に浪漫的な計畫をさへ廻はして居つた彼の如きは、全く其の時分のフレデリックの目的に、願つたり適つたりの籤まり役であつて、さてこそ此の哲學者の獨逸行きとなつた次第である。

其の外に、フレデリックは自分の陰謀を果すために、何時も猶太人を使用し、

そして一旦目的を遂げれば、自分の秘密が発覺はつるのを恐れて、弊履へいりふの如く、彼等を遺棄するのが常であつたから、現に彼のために、偽造貨幣を鑄造した猶太人の如きも、同様な運命を見たとか云ふことである、何は兎もあれ、共済組合を左右しようとしたフレデリック大王の意圖は、美事に遂げられて、年を追ふ毎に、其の事績倍々舉り、斯くて千七百八十六年には、「十全の式」(Rite of Perfection)や、「古代及び認可蘇格蘭式」(Old and established Scottish Rite)なども再設されるやうになつた。又た是等の幾多運用を指導したり、且つ團の新憲法を制定したりしたのも、フレデリック大王だつたとのことである。

一方に於てフレデリック大王や、共済組合員やが、佛國に於ける加特力教會と王朝を覆滅せしめようと、物質的の計畫を廻らして居る間に、他方に於て舊秘密教の餘燼再び燃わ出して、其の勢ひ燎原の火の如く、今やポルドウからセント・ピーターズブルグ(今のレーニン・グラード)に到るまで、歐洲全體を一紙のに

しようとする概があつた。

元來佛國の秘密教は、共済組合の教理を普及させないために、却つて外面、其の形式を採用して居つたのであるが、煉丹方士派の共済組合員たるマルチース・ドウ・バスクアリ (Martines de Pasqually) が、千七百五十四年に「選ばれた僧侶團」(Elected Priests)なるものを組織するに及び、漸次勢力を張り、後ち「マルチン派」若くは「天啓派」(Illumines)として、大に世の注目を惹くやうになつたのである。彼は基督教の信仰の中で教育された猶太系の西班牙人であるから従つて其の教義が殆ど全く猶太秘密教の換骨脱胎に過ぎないのも、固より無理はなからう。マルチン派の儀式は大體二種に分れ、第一は人間の墮落を代表し、第二は人間の最終の復活を意味してゐるから、是れも共済組合の方面を、少しく焼き直したものに外ならない。

第六章 猶太秘密教派と革命

猶太秘密教が、基督紀元の劈頭から、非基督教的立場に於て、如何に重大な役目を演じたかは、既に大略前でも述べたから、爰では革命に對する彼等の態度如何といふことを、一通り説明する積りである。

歐羅巴に於ける總ゆる叛亂の背後には、或種の秘密教の——必ずしも猶太人とは云へないにしても——感化が潜んで居るといふことは、近時歴史的研究により、漸く闡明さるるに至つた事柄であるが、然し吾々の現在知り得る所を以つてすれば、例へばカティリン (Cathline) や、グラツキー (Gracchi) やの陰謀とか、ジャック・ストロー (Jack Straw) や、ワット・タイラー (Wat Tyler) の叛亂とか、或はジャック・ケードの暴動とか、佛蘭西の百姓の一揆とか、更に獨逸の

百姓戦争といつたやうな内亂は、決して猶太人の、關與する所ではなかつたらしい。

が、其れにも拘らず、近代革命に於ける猶太人の勢力は、必ずしも侮るべからざるものがあるのであつて、其の性質を吟味して見ると、財政的と秘密教的との凡そ二様に分類することが出来るやうである。中世紀を通じて、猶太人が基督教徒の非難を買ふたのは、主として魔法使ひであり、且つ高利貸しであると云ふ點であつたが、十七世紀以來、彼等が革命の背後で、色々と活躍した跡を顧みても同様な役割は、魔術及び暴利者てふ一層現代的な名前の下で、彼等によつて、同様に行はれたやうであつて、如何なる社會的若くは政治的の暴動が起つても、猶太人の富豪達は、何時も勝ち目のある側にはかり金を貸し付け、又た基督教徒が何所で叛亂を起しても、猶太人の學者や、教授や、秘密教徒やは、必ず其の尻推しをしたのは、詰まり是れを己れの目的に利用しようとしたのである。

例へば英國の大叛亂に於て、猶太人がクロムウエルの鐵騎隊、若くは彼の國務協議員側には加擔しないで、却つて軍事請負師、高利貸、高等密偵等として、叛徒側の味方になつたのも、全く其のためであつて、此の種の秘密援助は、猶太人そのものの存在さへ、未だ全く一般人に知られなかつた當時だけに、彼等の隠れた力を尙ほ一層怖るべきもののやうに考へしめたのである。是れより先き千二百九十年に、エドワード一世は猶太人を、悉く國內より放逐したから、凡そ三世紀半といふものは、全く彼等の隻影だも、英島内に認めない有様であつたが、此の間に「秘密猶太人」(Crypto-Jews)なるもの西班牙より渡來して、巧に英國内に潜伏し、偶々西班牙と聲を構ふるに及び、彼等の假面一時に剝落したことがあつた。

吾々は爰で政治上に於ける彼等の一切の後暗い行動を、悉く列叙することは出来ないが、兎に角、猶太人の演じた役目は、何時も終始一貫の主張を無視して、

苟も利益にさへなれば、晨に越客を送り夕べに吳人を迎ふるも、毫も介意しないと云つた極めて唾棄すべき、不見轉式の氣質を何所までも發揮したのにある。所で、利得のためには手段を選ばぬと云つた、然うした唯物的執着心の裏に、何時もながら彼等の古い「救世主出現の夢」が尙ほ醒めきれないで居るのを見出すのは、全く一奇であつて、現に共和政府時代の英國の叛徒の如きも、不思議に同様な思想を抱いて、「イスラエルを解放せよ」とか「イスラエルの復活近づけり」など云ふことを、屢々口にして居つた。

十六世紀以降、猶太人の大衆が波蘭に植民し、そしてパール・シエム派(Palestine Shems)一名ザツデイキムと稱する奇蹟演者の一團が現はれた。パール・シエムなる語は「名の先生」といふ意味で、起原を獨逸波蘭系猶太人に發し、つまりエホバの神の御名を、奇蹟に利用する猶太秘密教の信仰から出たものである。猶太秘密教の傳説に依ると、特殊な知識或は清い生活を持つてゐる一部の猶太人は、

自由に神の名を使用しても、差支へなしと云ふことになつて居つた。で、パール・シエムなるものは、云はば斯う云ふ力を習得した爲め、是れを以て咒符を書いたり、靈魂を呼び出したり、或は萬病を治療したりするに、使用したものに外ならない。

救世主の時代が近づいた、と依然信せられて居つた千六百六十六年に、スミルナの一家禽商モルデカイの子、シャツベタイ・ゼビ (Shabbethai Zebi) なるものが突然現はれて、自らを例の待ち設けられた救世主だと宣言し、そして信徒に、パレスティンや、埃及や、東部歐羅巴、並に各都市の頑迷な猶太人までも殆ど悉く糾合したには、全猶太人社會をして、一時に沸き返へるやうな、上を下への大混亂を來たさせたことがある。ゼビは老練な猶太秘密教徒で、大膽にも日常エホバの名を口にし、皮膚には馨高い香水を塗り、絶えず海水浴をなし、殆ど慢性的の無我境に生活し得る、驚嘆すべき力を持つて居つたと云はれてゐたが、自ら、

「地上の王の王」と僭するに及んで、信徒の猶太人間に、彼を咒ふものと、彼を信するものとの二派が生じた。けれども後、彼が更に猶太教を排斥して、自ら回々教徒だと稱するやうになつて、何人も彼を非難しないものはなく、結局、彼はベルグラード近くの城内に幽閉され、千六百七十六年病歿したのである。

パール・シエム一派のものは、其の後獨逸、佛蘭西、英國等の各地に出現して旺んに其の所謂「奇蹟」を演じて居つたのであつて、其の中でも殊に知られたものは、サムエル・ジャコブ・ファルク (Samuel Jacob Falk) と稱する秘密教徒の一猶太人であつた。彼は摩訶不思議の力を有し、且つ隠れた寶を發見することが出来るると自稱した。彼はウエストリアで、妖術者といふ科とがで、火刑に處せられようとしたが、逃れて英國に走り、此の地で大に歓迎され、猶太秘密教徒として且つ奇蹟の行者として、頓に聲望を高めた。

彼は總ゆる點から觀て、洵に驚嘆すべき人物であつて、一部の人は、彼を以

て全猶太人の長たるべき人であるとなし、彼の性行に關する總ての驚くべき事柄を、悉く純然たる政治的計畫の一部だと見做さうとしたほどである。彼は自分の理想的社會組織を述べて、一切の人類をして、民族的、社會的若くは宗教的に、最早や分裂せしめないやうに、そして、もつと平等ならしめるやうに、世界的の國家若くは諸國家の聯邦を達成するにあるとなして居るのである。其のためか何うかは知らぬが、佛蘭西革命を初め、其他幾多の叛亂や掠奪等に、彼は何時も黒幕となつて活動した。

第七章 バヴァリアの天啓團

現代の革命運動を知らんと欲せば、先づ須らく天啓説 (Illuminism) の何たるかを知らなければならぬが、所で、是れに關する諸家の説は、故意か、無心にか

多く其の真相を曲解し、讀者をして岐路に迷はしむるものが少くないから、左に少しく其の起原並に本質に就いて、觀察することにしよう。

一節。天啓團の起原。一般はワイヌハウプト (Weishaupt) を以て、此の派の開祖であると考へて居るらしいが、決して然うではない。彼は單に此の派を天啓團イルミナチと命名した、云はば名づけ親に過ぎないのである。實際を云ふと、現在の社會組織を顛覆し、且つ一切の既成宗教を破壊しようとなじた人は、神代の太古から夙に存在したのであつて、従つてワイヌハウプトの思想の多くは、既にケーン派にも、カルボクラテス派にも、マネス派にも、ファチマイト派にも、亦たカルマト派にも、存したのであるが、唯だ「天啓派」(Illuminati)なる語は、初めてマネス教徒によつて使用されたらしい。

所では等の東洋思想が、何うしてワイヌハウプトに傳はつたかと云ふに、一部の人はシエズイット教を通じてだと主張して居る。成程、斯う主張することは、

やがてシエズイットを以て、天啓派の秘密な鼓吹者とも見做し得る譯であるからシエズイット教の反對者にとつては、是れは願つたり適つたりの論法かも知れぬがゴールド氏 (Gold) の如きは其の誤りを指摘し、「ワイヌハウプトは却つてシエズイット教の大敵だつた」となして居る。けれども、猶太人バルエル (Bar-el) の説によると、ワイヌハウプトは幾分、シエズイット教流儀の教育を受け就中、一人の頭目の下に、幾多の人々が世界中に散在して、同一目的を達しようとするシエズイット教の宗旨に、彼はほとほと感心したさうである。

けれどもシエズイット教は、或る意味に於て、一人の大將を首班に推戴して、同一義務を果たす一軍團であるから、ワイヌハウプトの體制は、是れと全然趣きを異にし、前者が其の長上に服従しながらも、尙ほ且つ自らの目的を意識せるに反し、後者は極めて巧みな詐術を以て、信者を誘ひ込み、そして彼等の全く與り知らない目的に、彼等を導き行くものである。秘密結社にも、正直なものもあれ

ば、不正直なものもあることは、是れで知れよう。

ワイヌハウプトはシエズイット教から、唯だ信徒の訓練法や、服従強制法や、人心收攬法やを採つただけで、大體に於てシエズイット教を嫌つてゐたから、従つて彼の目的は全然是れと違つて居つた。

扱て然らば彼は一體何所で、其の最初の發心を得たのであるか。傳へ云ふ、千七百七十一年の頃、多年埃及に住んで居つたケルマー (Koelmer) と稱するザツトランドの一商人が、自分の東洋で修業したマネス教を擴めようとして、歐羅巴に歸來した。佛蘭西に行く途すがら、偶々マルタ島に立寄つて、其所でカグリオストロ (Cagliostro) に遭ひ、人民の間に、叛逆を起させようとした廉で、逐はれてアヴィノン及びイオンに行き、此所で天啓派の間に、二三の門徒を作り、同年再び途を獨逸にとり、遂にワイヌハウプトと相知り、彼に自分の秘密教の總ての秘傳を、授けたとか云ふことである。またバルエルに依れば、其の時ワイヌハウプト

は自分の體系を考案するために、五年の歳月を費し、斯くて千七百七十六年五月一日やうやく「天啓派」なる名稱の下に、活動を開始したが、彼は又た「スバルタカス」(Spartacus)の赫耀たる驍名に肖かるために、其の名をも併用した。

ワイスハウプトの主たる目的は、現在の社會組織を破壊して、其の政治や行政を悉く改善し、縦へ如何ほど高い徳の王でも、是れを認めないことにあるのであつて、従つて彼は天啓説の目標をも、同様に財産や、社會權威や、民族的差別やを撤廢して、人類全體を、恰も一家族の如き幸福な状態に立ち歸らしめ、そして各々の父親を僧侶ともすれば、又た行政官ともする理想境を、現するにあるとした。多くの場合、自然の神を祈ることはあつたにしても、ワイスハウプトはデイドロー(Diderot)やホルバッハ(Holbach)の如く、自然そのものを神と見做したから、彼には勿論宗教もなければ、將た僧侶もなかつた。又た十九世紀の社會主義的自由思想家として、有名なルイ・ブラン(Louis Blanc)はワイスハウプト

を以つて、「今まで生存した中で最も陰險な陰謀家の一人」となして居るのである。

二節。天啓團の理想。天啓團を辯護するものよりして見れば、天啓團は如何にも美はしい思想と、極めて高遠な理想とを、懐いて居る立派な一つの團體であつて、又た其の主義綱領を穿鑿して見ても、到る所に結構づくめの文句が充ち満ちて居るから、素通りの外觀者に固より其の内幕の解らう筈はない。が其所に詐欺會社發企人たる秘密結社首領の、深い目論見が存する所以なので、此の會社の奥深い秘密は、縦ひ社員でも、或は多くの重役でも、一向御存知がないのである。斯うした惡辣手段は、九世紀の頃、既にアブデユラ・イブン・メームンによつて採用されて居つたが、其の後フレデリック大王も、ヴォルテールも、共濟組合も、多く是れを踏襲したのである。

此の點に於て、ワイスハウプトも亦た決して、ひけを取るものではなかつた。

彼はヴォルテール及びフレデリック大王と同様に、表面、基督教會に好意を寄せ、振りをしつつ、裏面に於ては赤い舌を出し、却つて是れを覆没させようと、書策をさく／＼怠りなかつたのである。若し夫れワイスマウプトの眞の政治論に至りては、それは要するに、現代の無政府主義と、何等の軒輊する所ないものであつて、即ち「人は自らを支配しなければならぬから、總ての支配者は徐々に驅逐しなければならぬ」とするのが、彼の政治論の骨子であつた。が、彼は努めて總ての急激な革命思想を斥け、唯だ極めて平和的方法によりて、是れを仕遂ぐべきものであるとし、次ぎのやうに云ふて居る。

「總ての人間生活の第一階段は野蠻であり、従つて性質も粗野であつたから、家族が唯一の社會であり、是れによりて、人は容易に飢渴を満足させ、又は是れによりて人は充分に、平等と自由とふ二つの結構な品物を、享樂することも出来たのであつて、是等の境遇に於ては、健康は人間の普通状態であつた。そし

て其の時分の人々は、未だ自分の心の平和を失ふたり、且つ自分の不幸の禍因たる、權力慾とか、嫉妬心とか、疾病とか或は其他の様々な想像の結果たる總ての暗鬼などを、意識したりするほどに、開けてはゐなかつたから、幸福であつた」と。

更に彼は、此の様な原始的の幸福な状態から、人間が墮落した過程を述べて、斯う云ふて居るのである。

「家族が殖ねるに従つて、食物が缺乏し始め、遊牧生活が止んで、財産制度起り、そして人々は居を定めた。それから農業によりて、諸家族が相接近し、斯くて言語が発達し、共同生活によりて、人々は互に自分を抑制した。……が、爰に没落した原因があり、平等も亦た消滅した。今や人間は新しい未知の幾多要求を感ずるに至つた」云々。

斯くて人々は、恰も未丁年者のやうに、王といふ監督者の下に隷屬するやうにな

つたのであるが、然う何時までも未丁年者ではない。丁年に達して、自らを支配しなければならぬ。

「なせ人類は其の最高環境に到達し、自らを指導する能力を有することが出来ないだらうか。どうして自分を導くべきかを知る人を、永久に他から導かなければならぬだらうか」。

とはワイヌハウプトの常に口にする繰言であつて、彼は又た人々が單に王から獨立するばかりでなく、更にお互からも獨立しなければならぬことを説いて、

「他に求める人は其の人に依頼することになるから、結局自分の權利を放棄したと同然だ。で、求めることの少いことは、自由への第一歩であつて、野蠻人と最高の文明人とだけが、獨り自由人である。自らの要求を倍々制限する術は同時に自由を達成するの術だ」。

とし、それから愛國心なる罪惡が、發生した所以を示さうとして、

「民族及び國民が發生すると同時に、世界は最早や單一の王國てふ大きな家族ではなくなり、此に於て自然の大きな絆は裂かれて了まつた。……民族主義が人類愛に代り、今や自國民にあらざる總ゆる人々の利益を犠牲にして、自國のみを偉らさうに吹聴することが道德となり、従つて外國人を侮つたり、ダシぬいたり、或は辱めたりしても、一向に差支へないものとされて居る。此の道德は即ち愛國心の然らしむる所だ。愛國心、郷土心、ロカリスム家族根性から、結局、自我心が発生する。で、愛國心を縮小せよ、然らば人々は再びお互ひを、眞に知り合ふやうになりて、お互に對する依頼心もなくなり、斯くて結合の結束も擴大し弛緩するであらう」云々。

と、彼は述べて居るのである。人間の墮落と、其の原始的の幸福を失ふに至つたと云ふことは、古代の秘密教の傳教を、單に新しく翻案したるものに過ぎないから、是れを以てワイヌハウプト一個の、若くは天啓派だけの、教義とすること

は出来なけれども、古代の宗教が、人間を其の以前の状態に、復歸せしむる所以を、救世主の出現に期待してゐるに反し、ワイヌハウプトは、是れを人間自身の復活に待つべきものとなしてゐる點で、大なる懸隔がある。

けれども、斯くの如きは、單に天啓派を、表向きからのみ解したもので、必ずしも其真相に觸れたものと云ふことは出来ぬ。何となれば、此派の眞の目的は寧ろ「世俗的及び宗教的政府を顛覆して、権力と財寶とを得、そして自ら世界の支配權を獲得する」にあつたからである。所で、然うした目的を達成するには、勿論多くの加盟者を得なければならぬ。多くの加盟者を得るには、彼等をして「他の何人も知らない、そして世界の多くが、暗中模索してゐる或物を、自分だけが知つてる」と云ふ快感を、持たせるようにしなければならぬ。秘密結社の奥の手は實に愛に存するのである。

そこでワイヌハウプトは入社志願者に對しても、「秘密結社を設けて、有らぬ

る階級、民族、並に宗教等に屬する、割合に無價値な人間をも、亦た最高級の人々をも、外部の權力を用ひずに、總て支配し、そして彼等を打つて一九となし、一つの靈と魂とを彼等に吹き込み、彼等を世界の到る所に散在せしむることが、一體、何を意味するか、君は充分に知つて居るか。端的に云ふと、秘密結社とは抑も何であるか。それが世界の大きな舞臺で、如何なる地位を占め、且つ如何なる役割を爲すかを、君は知つてゐるか」と、先づ以て相手の好奇心を唆つて置いてから、一步また一步と、徐に釣り込むのである。それでも決して自分の眞意を打ち明けないのが、彼に深い魂膽ある證據だ。

「私は直接自分の下に居る二人だけに、自分の全き靈を吹き込めば可いのだ。さすれば是等の二人は、又それ〴〵に他の二人に吹き込み、斯くて限りなく自分の教義は擴まるだらう。此の様な仕方、イザ鎌倉となれば、命令一下立所に一千の人々をも水火に投ずることが出来る」とは、全く彼の本音を吐いた述

懐であつて、是れは決して誇張でもなければ、又た單なる氣焰でもないらしい。

更にワイヌハウプトは、苟も自分の利用に供し得るものでさへあれば、縦ひ過去及び現在の如何なる宗派や團體やからでも、總て是れを採擇して、自家藥籠のものたらしむることを、躊躇しなかつたのであつて、斯くて諾斯士教、マネス教、近代哲學者、佛國百科全書編輯者（デイドロー、ダラムベル等）、イスメール教、暗殺團、ジエズイット派、騎士團、共濟組合、マキアヴェリー哲學、並に煉丹方士派等の教義や秘傳やを、悉く分析したり抽出したりして、是等を自家の用に供したから、此に於てか天啓派そのものの内容も、極めて複雑なものとなり、云はば人類の從來發明した、一切の不得要領と瞞着との性質を、悉く兼有するものとなつたのである。

三節。天啓團の全盛期。

天啓團を最初の共濟組合と關係させたのは、クニツゲ（Knigge）及びボーデ（Bode）の二人であるが、カグリオストロも亦た兩者

を結合させる重要な一人であつた。彼の自白する所によれば、彼の使命は「共濟組合をワイヌハウプトの計畫に引き込む」ことであつて、其の爲めに、彼が使用した資金は、總て天啓團から支出されて居つたと云ふことだ。また彼はマルチン派とも聯絡を取り、是れをワイヌハウプトのために利用したのであつて、バイエルの説に依れば、基督を元來「天啓派」^{イルミナトウス}なりとして、新教僧侶の肩を持つよう、ワイヌハウプトに暗示を與へたものは、此のマルチン派であつたとか云ふことである。

が、ワイヌハウプトが色々と共濟組合を利用したやうに、共濟組合も亦たワイヌハウプトを、重寶な味方と考へた。と云ふのは、丁度、此の頃、佛蘭西及び獨逸の共濟組合員どもが、共濟組合そのものの起原や目的やに關し、疑問を懷きつつ、途方に暮れて居つたのを、ワイヌハウプトの旨を受けて、彼の片腕とも云はれたクニツゲが、是れを解決して、慰安を與へたこともあるからだ。此のために

天啓派は、新に多くの學者や、宗教家や、且つ國務大臣等を、其の會員に登録することが出来て、勢ひ旭日冲天の概があつた。

けれども、一盛一衰は浮世の習ひで、思はぬ出来事のために、一敗全く地に塗れようとは、固より神ならぬ身の知る由もなかつたのだ。事は千七百八十五年七月であつた。天啓團員で兼ねて福音主義の説教師たりしランチエ(Lanise)なるものが、天啓團の使者として、シレジアに赴き、途に電雷のために、打たれたことがある。其の時、彼の懷中より出た天啓團の訓辭なるものが、偶々、パウリアの政府に、陰謀を策するものと知れて、爾來、此の教團は、公的に全く禁遏されるに至つた。で、一部のものは、此の時を以て、天啓團滅亡の期とさへ報じたほどである。

しかし轉んでも只是起きぬのが、此の種團體の常であるから、固より其の位のことでは、屏息するものではなかつた。そこで何とかして、活路を見出さうと、思

ひ付いたのが、名儀を變更して、新しい變装の下に、捲土重來の躍進を試みようとするのであつたのだ。それにつけ、先づ差當つて、巴里の「聯合友愛團」(Amis Reunis) 支部と、協力することを、第一着の政策としたのであるが、是れより先き、此の支部とは、既に或程度の聯盟が、出来て居つたから、今度は單に舊盟を、一層固めるだけであつた。

其の頃、佛蘭西には、此の聯合友愛團の外に、ブリッソー、ダントン、カミル・ドゥモラン、及びシャンホール等の中産階級革命家から成る「詩神團」(Neuf Soeurs 支部があり、シルリー侯、アイギヨン公、クスチヌ侯等のラファエツト派や、並にオルレオアン派やの、貴族革命家達から成る「誠實團」(La Candeur) 支部があり、更に一切の革命的計畫を排斥する、空想的な幾多勤王家より成る、「社會契約團」(Contrat Social) 支部があつたから、「聯合友愛團」の使命は、總て是等秘密結社中の破壊分子を糾合して、自らの陰謀に参加せしむることであ

つた。それで「聯合友愛團」が、總ての他の結社から、自らの用に役立つ一切の要素を、拾集すれば、それだけ天啓團も、亦た自らの勢力を増大することになり斯くて日を追ふ毎に、是等の結社は、増々「天啓主義」をもつて、滲潤するようになったのである。

さう云ふ譯で、千七百八十七年頃には、佛蘭西の多くの共濟組合は、總て天啓團の同志となつたのであるが、然し其の中で、眞に秘術の傳授を受けたのは、僅に二十七名であつて、其他の人々は、約まり、何等かの利益を得ようとの胸算段から、却つて天啓團のために、甘く利用された阿呆者どもであつたと聞いては開いた口も塞がらぬ次第である。更に一層驚くべきことは、是等の數多い阿呆者どもの中には、三十名内外の歐洲諸國の王族も、加はつて居つたことであつて、彼等の多くは、天啓派僧侶の阿諛甘言にたらし込まれて、無我夢中に宗旨變へをしたものらしい。で、ワイヌハウプトも、能く其の邊の呼吸を、呑み込んで居つ

たから、是等王族の掠鳥達には別に團の宗旨を傳授することなく、唯だ彼等を利用し得るだけ利用することを念とした。

今や危機は刻々と迫つて居るのであるが、固より多數の貴族や王族達に、それが判らう筈もなく、唯だ二三の達識者が、急迫せる危難を、世界に警告するのみであつた。千七百八十九年、革命が未だ充分に發展しない前、ルシエ (Luchet) 侯は、既に左の言を發して居る――

「瞞まされた人達も、自由に對して壓制、有能に對して無能、徳に對して不徳文明に對して蒙昧を、援護しようとする一つの陰謀が、今しも實現しようとしてゐることを、知らぬことはあるまい。此の陰謀的結社は、世界を支配することを志し、其の目的は、世界の統治である。此の様な計畫は、一見信すべからざるもの、格段なものやうにも、思はれるか知れぬが、是れは決して夢でもなければ幻でもなく、將に起らんとしつつかある事實である。……是れほごに世

界を惱ます災難は、少くとも過去に於てはなかつたやうだ」と。

それから更にルシエは、三四年後に起らうとして居つた事變を豫告して、「國王は自分の上に、幾多の支配者を認めて、彼等の忌むべき政治を許し、且つ自らは是等の野心満々たる狂暴な浮浪團の翫具とならなければならぬだらう」と説いて居るのである。

千七百九十一年「陰謀の内幕」(Mysteres de la Conspiration)と題するバムフレットが發行せられたが、是れを見ると、革命の全計畫が、一目瞭然と窺知され得るやうであるから、左に其の一部分を摘録することにしよう。

「吾々は總ての組織を顛覆し、總ての法律を廢止し、總ての權力を絶滅し、而して人民を無政府状態に、放免しなければならぬ。吾々の制定しようとする法律は、勿論、直に施行せらるることはあるまいが、それにしても人民に、權力を返すようになる、彼等は自分の保存したいと思ふ自由のために、何時まで

も反對するだらう。吾々は姑く彼等の歡心を買ひ、彼等の希望に阿り、そして吾々の事業が、仕遂げられた曉は、彼等に幸福を與へることをも、約束しなければならぬ。が、立法者としての人民は、極めて危険なものであるから、彼等の我儘と勝手な真似は、努めて牽制するようにしなければならぬ。彼等は單に自分の氣に入るやうにのみ、法律を制定しようとするから、結局無知のために其の職能を濫用することになるだらう。が、それでも人民は、立法者を意の儘に、動かし得る挺子てこであるから、吾々は是非とも彼等を、支持者として利用し吾々が破壊しようとするものを、彼等に憎ませたり、且つ彼等の行く手に幻影の種子を蒔いて置いたりもしなければならぬ。また吾々の攻撃しようとするものを、人民の敵たらしむるために、苟も吾々の方法を彼等に宣傳し得るもので、金で買へるような機關があれば、其の總てを、吾々は買収しなければならぬ。僧侶は輿論を通じて、一番有力なものであるから、彼等を撲滅するには、

先づ宗教を擲論したり、僧侶にケチを付けたり、彼等を偽善的の化物と貶したりするの外はあるまい。マホメットも最初、其の宗教を打建てようとするや、矢張り此の骨を心得てゐて、先づ亞刺比亞人や、サルマト人や、並にスキシア人等が、信仰して止まなかつた偶像教を、第一着に罵倒することを忘れなかつた。それで吾々も、差當り貴族を誹謗して、彼等の出現を咒ふべきものたらしむると同時に、且つ未だ曾て無かつたほどの平等社會を匂はせて、人民を有頂天ならしめなければならぬ。彼等の中の頑固なものは、已むを得ないから血祭りに上げ、其の他のものを嚇すために、彼等の財物を燒棄しなければならぬ」云々。

また兵士を誘惑して、自分等に味方せしめ、且つ「物の悪い方面のみを見て、善い方面を見ない残忍無知な人民」をして、行政長官を壓制者と信せしむるため、其のバムフレットには、斯うも云ふて居るのである。

「兵士に餘り多くの權力を與へないように、吾々は要心しなければならぬ。彼等の壓制は、餘りに危険である。吾々は費用のかからぬ正義の餌を以て、人民を釣ひ、租税の大減縮や、財産の一層平等な分配や擴布や、且つ彼等に一層多くの自主權やを、與へるように約束しなければならぬ。總て是等の幻覺は、人民を熱狂せしめて、應て彼等の抵抗力を、麻痺せしむるかも知れぬが、其の様な犠牲や、彼等の數などを、構つて居れるものでない。掠奪、破壊、燒き拂ひ總て是れ革命の必然の結果ではないか。此の世に神聖なるものは一つもなし。吾々はマキアヴェリと共に言はう、絶對絶命の場合に、敢て手段を選ばず」と。

斯う云つたやうな方法は、其の後の殆ど總ゆる過激主義者若くは革命の發頭人達によりて、一樣に採用され或は模倣されたものであつて、實際の所、是等の人々は直接將た間接に、殆ど一人として、天啓團及び其他の秘密結社の感化を、受け

ないものはなかつたのである。社会主義者マロン (Malon) の報ずる所によると、無政府主義者バクニンの如きも、實はワイスマウプトの一門弟であつて、前者の秘密結社「社会民主同盟」 (Alliance Sociale Democratique) と、千七百九十五年の秘密結社との間に、靈犀互に相通するものがあつたことは、クロボトキンも亦た夙に是れを裏書きしてゐるのである。

巴里自治體^{コムニシ}及び第一インターナショナルの創設に際し、共済組合其他の秘密結社が、如何に大きな役目を果たしたかは、隠れもない事實であつて、佛國の共済組合員が、從來幾多の政治的並に社会的暴動に寄與した自分等の功を、時々、鼻高々に誇つたのも、固より無理からぬことだ。「十八世紀に於て、共済組合は世界の到る所に散在し、其の承認を得るにあらずんば、何事をも成し得ない状態であつた」と、千八百七十四年に、マラバート (Malapert) が、言ふて居るほどであるから、其の全豹察すべきであらう。

第八章 接神學派

接神學 (Theosophy)。接神學なる語は、マルチン派の理論を表示するため、十八世紀に初めて用ゐられたのであるが、是れより凡そ二世紀も前の千六百十二年に、ハーゼルマイエル (Haselmeier) が「接神學者煉丹方士の讚美すべき友愛團」なる一書をもつた頃より、既に知られて居つたのである。千八百七十五年米國紐育に、ブラヴツキー (Blavatsky) 女史と協力して、現代接神學會を設立したコロネル・オルコット (Colonel Olcott) の説によれば、此の語は、彼の會員の一人が、辭書のページをめくつて初めて發見し、爾來、是れを採用することになつたと云ふことだ。

此のブラヴツキー女史といふのは、其の二年前亞米利加に來たものであつて、

彼女の公言する所によると、以前、西藏で或る秘密教の秘法を傳授されたところとであるけれども、而も現代接神學會の内幕を、素破抜いたグエノン (Guenon) は、彼女の言を眉唾ものとなし、實は歐洲大陸の隱者から、教を受けたのだ、と云ふて居るのである。成る程、さう云へば、其の時分、巴里に居つた「埃及友愛團」に屬するセラピス・ベー (Serapis Bey) 及びツイチ・ベー (Tuiti Bey) の兩人に彼女が師事した、と信するべき多少の理由がないでもない。

基督に關する彼女の言として、グエノンの引用する所に依ると、「私にとつて基督教徒の所謂神人、また總ての國々の權現の標本たる基督は、決して歴史上の人物ではない」から、従つて基督の傳記なるものは單に一種の寓話に過ぎぬ。と云つて居るかと思ふと、又た何所かで、彼女は「基督が基督紀元の間か、或は其の一世紀前かに、生活したかも知れぬ」ことを斷言し、そして此の種の傳説の歴史的價値を、否認する學者を罵つて、彼等は「虚言を吐き或は囁言を語るもの」

とも、言ふて居るのである。

それから彼女は、何事を語るにしても、何時も「師など」を、引き合ひに出すことを常として居つたが、「師など」とは、一體、何人を指したかと云ふに、主として猶太秘密教徒を意味したことは、殆ど疑ふの餘地がない、現に猶太人の著述家アドルフ・フランク (Adolphe Frank) なども、現代接神學會に及ぼせる猶太秘密教の直接感化を、證示してゐるほどである。自らを佛教徒と名乗つてゐたブラワツキー女史は、物質的の幸福を求めようとする一切の計畫より身を遠ざけ且つ自らの創立した接神學會をも、「政治に關係せず、社會主義及び共產主義の不健全な夢想に反對し、只管、可知界若くは不可知界の神秘的眞神を、闡明することを旨とする」と、宣して居るのであつた。

第二編 民主主義的秘密結社

第一章 佛蘭西に於ける民主主義的秘密結社

由來、佛蘭西人は餘りに多辯で開放的である上に、且つ訓練と結束とが乏しいため、秘密を必要とする陰謀事には、極めて不向きな民族である。が、それでも模倣心が強いので、他國民より造作もなく幾多の破壊手段を習ひ覺わ、其の上に政府當局者が本能的に嫌ひと來て居るので、斯う云ふ民族の間に、革命の雰囲気、幾世紀に亘りて、醗酵されたことは、想像するに左まで困難でない。が、實際を云ふと、佛蘭西革命は必ずしも民主的の運動などと、呼ぶべき筋合のものではなく、パウル・ブルジョー (Paul Bourgeois) も言ふて居るやうに、其れは

寧ろ「狂亂の發作」から生まれ出たものであり、或は一層科學的に云ふと、集合的精神病より發生したものである、と評した方が妥當かも知れぬ。然らば、一體何人が是等の精神病者を踊らせて、革命を成就したかと云ふに、コパン・アルバンセリ (Copin Alpinelli) などは、共濟組合員が、其の下準備をなしたのだと唱へて居るが、革命のドサクサ紛れに乗じて、多くの共濟組合員が、斷頭臺上に載せられたのを思ひ合せると、彼の言は餘り當てにもならぬやうだ。

また一部の論者は、獨逸の隠れた手が動いたからだとも言ふて居るが、成る程當時、佛國の無神論的、破壊的思想家や詩人やが、フレデリック大王の支持を受けたのは、確に事實らしい。更に信すべき文献に徴すると、當時に於ける佛國の唯一の敵であつた普魯西か或は英國かの金貨が、ミラボーやロベスピールやのポケットに、潜り込んだことも疑ふべくもない事實のやうである。

ナポレオンがセント・ヘレナに流されて、佛蘭西は再び善政を布かれる希望に

輝かされ、斯くて法律も、秩序も、家族も、社會も、宗教も、舊慣も、漸く安定を得る望みだけは與へられたが、而も多くの良民は、革命のために殺され、剩へ間違つた哲學者や公許の罪人やすら、未だ全く其の跡を絶たずして、舊態依然たる南部佛蘭西に、偶々、「愛國者聯合」なる一秘密結社が生まれて、最初の禍因を蒔かうとしたのも、考へて見れば、必然の成行きとも云へぬことはないが、然し是れは治安を紊す虞れありとして、程なく禁止された。尋いで一八二〇年巴里に、王朝を顛覆して、共和制を確立する目的をもつて、「眞理の友」なる秘密結社が、學生、藝術家、著述家、商人、遊民等により、共濟組合の様式に準じ、組織されたが、是れ亦た神經過敏な政府當局者のために、忽ち解散を命せられ、其の指導者は、投獄されるか、或は逃亡するかした。

それにも拘らず、幾多の破壊的な秘密結社は、其の後も、雨後の筍のやうに簇生した。就中、最も著しいものは「佛蘭西革新結社」と、「人民の友結社」とで

あつて、前者は専制君主を永久の仇敵と見做し、機會さへあれば君主を暗殺することを目的とするものであり、後者は印刷物の取締と、國會の改革とに關するシヤール十世 (Charles X) の勅令に、反抗するため組織され、一八三〇年七月の巴里一揆を起したのは、實に此の派が重心であつたのだ。

また一八三二年にも、「人民の友結社」は、ノートル・ダム寺院に火を放ちて幾多の官署を占領したり、市街に防塞を築いたりして、將に革命を完うせんとしたが、遂に失敗した。けれども此の結社は、程なく「人權聯合會」なる新装の下に生まれ出で、佛蘭西全部を軍隊式に組織して、一八三四年リオン及び其他の大都市を占領しようとしたが、今度も亦た政府のために、鎮壓されてしまった。で再び名を改めて「家族の結社」となし、ルイ・ブランの共和主義と、ブルードンの無政府主義とを支持しつつ、切りにルイ・ヒリツプの生命を窺ふたが、遂に成功しなかつたばかりでなく、此の結社も亦た解散を命せられた。

此に於て、結社員の一部は、懲りすまに又ぞろ、「四季の結社」なるものを組織し、そして相も變らず「一切の君主や、貴族や、並に其他の壓制者やを、暗殺する」ことをもつて、目的となし、且つ平常は殺人、強盜、破壊行爲等に没頭した。で、一八三九年五月の巴里革命失敗と同時に、又た存続すべくもなからうと思はれたに、何ぞ測らん、一八四八年二月の叛亂に乗じて、再び其の活動を始め、斯くてルイ・フィリップを海外に放逐したり、ルイ・ブランを労働者委員長に任じたりして、當時、夙くも現在ロシア勞農制の先驅をなしたのである。

ナポレオン三世の治下にも、依然、秘密結社の存在したことは、伊太利人オルシニ (Orsini) が、彼を暗殺しようとして企てたことでも瞭かであつて、一八七一年には、巴里自治體に脅威政治を施いて、一時功を遂げ、其の後、今日に到るまで外國並に國際秘密團體の支部として、相も變らず、現社會の破壊に、憂身を盡して來たことは、疑ふべくもない事實のやうだ。

第二章 西班牙に於ける民主主義的秘密結社

西班牙人の性格は、佛蘭西人よりも一層殘忍で、堅實で、鈍重で、且つ奸佞と來てるから、秘密結社には、全く誂へ向きに、出來上つて居る民族とも、云へるだらう。それで、從來、西班牙の政治が、屢々失敗を重ねたのは、主として此の國に、秘密結社が榮々たからだと云つても、決して過言であるまい。

佛蘭西革命以前に於ける此の國の秘密結社は、獨逸の其れ等に類して、外面、博愛的の理想を有するものらしく見せかけて、裏面、陰謀を事として居つたのであるが、然るにナポレオン失脚して、フェルナンド七世が復歸するに及び、西班牙の民主黨は、荐りに活動して國王に反抗し、そして西班牙國內到る所に、無数の結社が、殆ど公然と組織され、斯くて深刻な暗闘や、露骨な宣傳戦やが、特に

グラナダ、マドリッド、及びバルセロナ等を中心として、猛烈に行はれたのである。

當時に於ける結社中で、最も主要なものは、一八二一年に創設された「Comuneros」^{コムネロス}であつて、是れを一名「バヂラの兒等」とも呼んだのは、曾て Juan de Padilla^{パヂラ}なる者が、自らの自治區の特權を保護しようと、カスチル人を率ゐて、チャールス五世に對し、叛旗を翻へした當時を記念せんためであつたが、勿論、當時の愛國的假面などは、綺麗薩張りとかなぐり捨て、今は唯だ正真正銘の共和主義を標榜して居るのであつた。

結社加入式は様々な珍妙極まる儀式を以て始終し、一切の集會も、亦た強い印象を與へる傳奇的な禮式の中に行はれたのである。先づ新入者達は、「武器の廣間」に案内されて、それ／＼の勤めを訓へられ、それから兩眼を布で蔽ふて、咫尺をも辨せぬ眞暗な室内に這入らされると、番兵の役を務むる結社員の一人が、

聲を張り上げて、「お通りあれよ、私が皆さんを、城の衛兵所に御案内致しませう」と、仰々しく叫ぶのである。が、勿論、城らしいものの影さへある譯でないから唯だ撥ね橋の上を通つて、一つの秘密室に導かれ、此所で、眼を開かれるのである。

見ると、四壁は幾多の甲冑や戦利品やで飾られ、滿堂の結社員は、總て目覺むるばかりの派手やかな禮装をしつつ、彼等の入來を、待ち設けて居ると云つた有様であつて、稍やありて結社の大統領 (Grand Castellans) とも覺しき一人が、徐ら立ち上がり、「偕て諸君は予の大佐 (Padilla) の楯の下に立つて、予が告げる誓約を心に繰返さねばならぬ」と宣言するまでは、肅として誰一人咳拂ひするものさへないのである。

そして彼等新入者は、人類の權利と自由、特に西班牙人の權利と自由を保護するために、一切の暴君に復讐をなし、又た長上が叛逆者と宣するものを總て殺す、

と云ふ誓約をしなければならなかつたのである。また若し彼等にして、此の誓約に背かんか、共済組合の宣誓に倣ひ、自らの首を絞首臺に、自らの身體を火に、其の灰を風に、喜んで任すことを辭せぬ、との宣誓をもしなければならなかつたのである。

それから彼等は、「Padilla」の楯を着け、出席者一同が、拔劍して、是れを彼等の頭上に翳すと、其の時、大統領は彼等に對し、「吾が在天の主にして庇護者たる Padilla の楯は、有らゆる危険より、汝等を保護し、汝等の生命と名譽とを救護せん。されど汝等にして、誓約を破らんか、吾は汝等の楯を奪ひ、吾が劍を以つて、汝等の胸を突かん」と、いとも嚴かに訓誡を垂れるのである。斯うした鬼面人を威す類の茶番狂言が、無上に無知な西班牙青年の心を、魅惑したものと見え、期年ならずして、「コムミュネロス」一名「パヂラの兒等」は、六萬人の誓約者（其の多くは無頼漢）を、吸収するに至つたのである。

羽翼既に整つたから、彼等は直に一揆を企て、最初は首尾よく功を奏して、フェルナンド七世を獄に投じたが、佛蘭西國王が一八二三年に兵を送りて、彼を救ひ出すに及び、叛亂は遂に鎮定した。其の後、コムミュネロス内に内訌起りて穩和派は共済組合に合し、尊王派は自らの秘密結社を作りて、革命に對抗したがそれでも破壊的の結社が、全然絶滅した譯ではなかつた。而已ならず、政府の壓迫が加はれば加はるほど、秘密の程度も、亦た増々嚴重になりて、西班牙を危難に陥れしめしこと、一再に止まらず、そして彼等の多くは、現に今日でも、海外に於ける主謀者の命を奉じて、旺んに暗中の飛躍を試みつつあるのである。

現代西班牙の陰謀團中、カタロニアに存するものなどは、最も特色あるもの一つであつて、其の團員は、主として血に飢いた無政府主義者より成り、極めて殘忍な性質を持つて居るかと思ふと、又た妙に犠牲の精神にも富んで居るあたりロシアの虛無主義者に酷似するものがあるやうだ。誤まれる正義の犠牲になつた

フェルラー (Ferrer) の如きは、當に此の團の代表的人物とも稱すべきものであつて、二三人の陰謀者共が寄り集ふ毎に、恰も彼を聖人の如く噂し合ふのも、彼等としては、敢て怪むに足らぬ。

西班牙の一州カタロニアは、曾て歐洲の中でも、最も自由な王國として存在したが、それでも久しく民族主義的不満の中心地となり、特に其の住民の一部たるカタラ人は、他の西班牙人よりも、多くの點に於て、異つた人種であつて、極めて勤勉で企業心に富み、且つ寛大で、正直で、眞面目で、復讐心強く、激昂し易いと來て居るから、陸海軍人としては、全く持つて來いであるが、其の代り、多少の慢心があつて、他の西班牙人を蔑視する癖がある。彼等の宗教と政治は、共に極端に流れ、中世紀の奇怪な傳説の信仰と、ボルシエキズムに近い現代の民主思想とが、彼等にとつては、何の不思議もなく合體して居るから妙だ。

そして彼等は、主として自らの方言 (Provencal 語 & Limousin 語やに近い言語)

を以つて、宣傳するので、一七一四年に、フィリップ五世は、是れを禁止しようとしたが、其の甲斐なく、今では却つて立派な文學さへ、發達して居るほどだ。彼等の民族運動は、多くの點に於て、愛蘭人、フランダール人、大戰前のポヘミア人、並に今日のアルサス・ローレン人などの運動に類し、主に下級の僧侶によりて支持され、一八八五年には「カタラ同盟」 (Catalan Union) てふ半秘密結社を組織して、西班牙の宗主權の下に、別箇の法律や、軍隊や、並に行政廳やを、要求しようとしたが、今次の歐洲大戰に於て、一敗地に塗れたから、彼等の大望は、最早や復活すべくも想はれない。

けれども、分離主義者等の運動は、依然、暗流となつて、水面下に渦を巻き、丁度、一九二六年には、再び彼等の陰謀が、表面に現はれ、斯くて幾多の陰謀者が巡禮に身を窺しつつ、將にカタロニア共和國を、宣言しようとして居る危機一髪の間際に、運好くも齡ひ古稀に達せるマシア (Maier) 大佐により、喰ひ止め

られてしまった。

其の後も、一再ならず、隠れた手が、海外より働きかけようとしたらしく、佛蘭西警察の証言によれば、幾多の陰謀家が、伊太利の反ファシス黨員と同じく、リツチオツチ・ガリバルヂ (Ricciotti Garibaldi) により、賣られたと云ふことであるが、西班牙政府は是等を極めて寛大に取扱ひ、敢て處罰しようともしなかつた。けれども、今後新しい材料が擧がつた時は、少くとも内亂か、或は國難かを賭する時であらう。

第三章 伊太利に於ける民主主義的秘密結社

マキアヴェリリーとムツソリニーの母國は、古來、政治家、破戸漢、浮浪人 (Lazzaroni) の搖籃地であると同時に、又秘密結社、勇敢、權謀術數、空想等の理

想的温室でもあつて、其の功過得失の、果して何れが大なるかは、姑く問ふを止めよう。けれども兎に角、伊太利が幾多の小獨立國を打つて一丸となし、そして遂に今日の大強國を築き上げるに至つた所以の要因は、主として秘密結社であると言つても、決して過言であるまい。と思はれるほどに、由來、伊太利では、各種の秘密結社が、榮々たるものだ。

けれども、伊太利に於ける是等秘密結社の歴史は、最初より甚だしく稗史小説の色彩を帯びてゐるから、従つて其の様なもの、一體、どうして「Carbonari」(炭焼夫團)のやうな、陰氣な秘密結社を、生み出すようになったかとは、最早や何人も説明し得ない位である。此の結社が、初めて記録に表はれたのは、ナポレオン時代に、幾多の政治的陰謀家が、身を炭焼夫に化けて、森林山岳の險に隱匿したるに端を發し、一八一五年後になつて、彼等は現代に不満を抱く下級僧侶や罷職武官やを勸誘招募した。

彼等の標語としたる所は、「森より狼を驅除せよ」と云ふことであつて、程なく全伊太利に、其の勢力を扶植し、結社員の數、無慮、數十萬人に達したのである。

カルボナリ結社の基本單位は、「Baracca」即ち小屋であつて、此所で結社員は會合し、一地方内の各小屋は、一長老 (Alta Vendita) の下に、一共和國を形造り、一小屋の各結社員は、お互ひを「良い從兄弟」と呼び、外の人々を「異端者」と貶したのである。そして各小屋の外部には、二本の樹の切株が立つてゐて、番兵の腰掛けとなり、小屋内にある三つの切株は、總理と、演說者と、書記との椅子に供され、親方と番兵とは、権力の表象として、斧を携へて居るのである。また各小屋の中には、三本の蠟燭を照した十字架、繩、赤白青のリボン、木炭の容器、水、鹽、土並に其他の象徴らしいものがあり、壁には結社の恩人たるサン・テオバルド (St. Theobald) の肖像畫が掛けられてあつたのだ。

儀式は大體上、共済組合の其れに類して居るが、而も飽くまで宗教的に行はれながら、半ば道化じみて居つて、基督をも「吾が良い從兄弟のエス」と呼び、新入者は両手を縛られて、Pilate (基督を裁いた羅馬の地方太守) に扮せる、緋の外被を纏ふた一結社員の前に、導かれるのである。此の場合に、他の結社員達もそれごとくに Caiphas (基督に死刑の宣告を下した猶太の高僧) とか、Herod (猶太の一門閥家) とか、或は人民などに扮せる役を振り當てられて出席し、それから一同行列を作つて、新入者を「橄欖山」に案内すると云ふ仕組であつて、其の際總ての新入結社員は、特殊な名前を與へられ、又た獨特な合言葉や握手の仕方や其他の認知法やを、教へられるのである。

其の後、カルボナリ結社は、政治的にも驚くべき勢力を振ふようになり、其の支部が、伊太利の全土に擴がつて、高位高官の人々すら、其の會員たるもの少からず、例へば羅馬法王の如きも、其の一會員であつたとか稱され、又た英國の詩

人バイロンなどは、確に其の會員であつた。

一八二〇年と一八二一年に、カルボナリ結社はネーブルス及びピードモントに叛亂を起し、ネーブルスのフェルデナンド王は、否やでも赤白青のカルボナリ標章を着けて、カルボナリの課した一八一二年の西班牙憲法に、宣誓をしなければならぬようになったが、是れと同時に、カルボナリも亦た其の極端な民主的旗幟を幾分緩和することにより、無政府主義者を抑へ付けて、秩序を回復する旨を、揚言しなければならなかつたのである。が、然し實際の所は、陽に國會を保護する真似をしながら、陰に共和國を建立するに汲々たる有様であつた。

當時、歐洲は到る所、王制と秩序とが、脅かされて居つたので、埃太利及び露西亞の主權者は、一八二一年十月埃太利のライバハ(Libech)に會議を開いて、力強く革命を阻止しようとし、埃太利の軍隊は、多少の抵抗を受けつつ、ネーブルスに到着した。之れを聞いたカルボナリは大に驚き、直に幾千人の兵を募つた

が奈何せん、熱誠はあつても、訓練足らず、お負けに、伊太利の正規兵が、入寇者たる埃兵に、寢返りを打つたので、是れを聞知つたカルボナリの指導者達は、肝を潰して海外に逃竄し、斯くて革命は、全く水泡に歸すると同時に、再び秩序と専制とがネーブルスを支配するようになったのだ。

ピードモントに於ても、貴族、役員、學生などが、カルボナリに加擔して、伊太利王國統一のために、示威運動を起したから、埃太利軍は彼等に一撃を與へてデモクラシーの夢を、永く破つてしまつた。

それより伊太利の民主的統一運動は、一八三一年に一青年マジニー(Mazzini)が、「青年伊太利」てふ新しい秘密結社を組織するようになって、いよ／＼實際的となつたのである。當時は丁度佛蘭西が、シャルル十世を放逐して、オルレアンのルイ・フィリップを民主制の傀儡として擁立し、其の政府が、伊太利の陰謀圖を支持しつつあつた折柄だつたので、機會は實に逃へ向きであつたのだ。

一八三二年に佛蘭西兵は、埃太利の陰謀團を助けて、埃太利の干渉に對抗させ斯くてアンコナの要塞を占領させたのであるが、此の占領は、國際法規を侵すものと見做されて、非常な物議を醸し、其のために、久しく捫着を重ねて居るうち遂に一八四八年、埃太利とサルデニアとの間に、釁を構ふるようになり、そこで彌々革命は、勃發したのである。サルデニア王 Charles Albert は、埃太利の反對側に味方し、多くの伊太利政治家も、亦た輿論に壓迫されて、彼の例に倣ふたが、獨り羅馬法王ピウス十世は、超然たる態度を持したので、マジニイは彼を放逐して、羅馬に短命の共和國を樹立した。けれども埃太利は、結局、戦争に勝利を得て、伊太利領土を割取し、そして法王も、再び自らの國家に、歸還することが出来た。

が、伊太利の陰謀團は、固より此の位のこととて、避易するものでないから、公然たる土俵では、到底埃太利の敵でないことを悟りて、爾來、其の力を、専ら潜

航艇式の活動に傾注し、マジニイ、ガリバルデー、及びカヴール (Cavour) の三人を親分として、カルボナリは大に生氣を盛り返したのであつて、特にカヴールは、サルデニアの宰相たる自らの地位を利用して、旺に陰謀を煽て上げたものだ。

一八五九年に佛蘭西は、再びサルデニアを援助して、埃太利と兵を交へしめ、戦ひ勝つてサルデニアは、ロムバルデー、タスカニー、モデナ及びバルマ等の地方を併合し、佛蘭西は其の報酬として、マゲンタとソルフエリノを領有した。是れと同時に、ガリバルデーはシシリイを侵略して、ネーブルス王を驅逐することにより、サルデニア王 Victor Emmanuel をして、伊太利王と名乗らしめた。

尋いで一八六六年に、エムマヌエル王は普魯西を援けて、埃太利と戦はしめ、其の報酬に、自らはヴェニスを併合し、更に一八七〇年獨佛戦争が勃發して、佛蘭西守備隊が羅馬を、撤退したる機會に乘じ、エムマヌエル王は法王の政治的權

力を縮小して、伊太利の統一事業を完成し、又たカルボナリ陰謀團の自ら任じた使命も、是れで一先つ團圓を告げた譯だから、彼等は最早や存在の理由なきに到つた次第である。換言すれば、カルボナリは本來、伊太利の統一てう一つの目的をもつて、生まれ出たものであるから、既に此の目的を達成した以上、最早や其の存在理由はなくなつた筈である。

多くの人々の中には、カルボナリの長所のみを知つて、彼等が其の目的を仕遂ぐるまで、如何ほど國家の安寧秩序を賊したかを、知らなかつたり、又たガリバルデー、マジニ、カヴール等の美點のみを認めて、彼等が如何に社會人心を、蠱毒したかに就いては、殆ど眼を閉ぢようとしたりするものもないではないが、吾々は彼等の長所美點を記憶すると同時に、又た彼等の短所缺點をも決して看却してはならぬ。

現代伊太利は此の間の消息に關して、割合に明察な判斷力を有するものの如く

ホルボナリの赤裸々な再現とも想はれし、一九二〇年のボルシエ并ク運動をも、物の美事に鎮定し得て、能く其の禍害を、未然に防遏することが出来たのであるから、今日の伊太利は其の *Mafia* 團や、*Camorra* 團や、「黒手組」や、並に *Mala* *Vita* 等の秘密結社を、耻辱と思ふやうに、又たカルボナリ團をも、汚辱と感じて居ることであらう。

第四章 土耳其に於ける民主主義的秘密結社

吾々が土耳其なる語を、初めて聞いたのは、一三〇〇年頃に、オスマンリと呼ばれたトルコマンの大遊族が、オスマン一世の下に、小亞細亞に一帝國を築いたのが、抑々の皮切りであつて、爾來、彼等は十四世紀の間に、西部亞細亞を悉く征服して、漸次歐羅巴を侵し、首府をアドリアノブルに置いたのである。

一四五三年にオスマンの後嗣、サルタン・ムハメッド二世は、コンスタンチノブルを占領して、凡そ一千年の歴史を持つた東羅馬帝國を打破り、それより東南歐羅巴に進出して、一六八三年維納の門戸を敲き、そして幾世紀に互り、希臘、セルビア、ブルガリア、並にマセドニア等を支配した。

一八七六年に、宮殿内の革命により、アブズル・ハミッド二世が王位に即き、僅々二三ヶ月にして、彼は全國に憲法を發して、基督教徒たる彼の臣民にも、同等の權利を賦與した。けれども一八七八年の伯林條約により、土耳其は其の歐羅巴領土の大部分を失ふたから、此の潑刺たる若き君主の治世も、餘り幸先き良いものではなかつた。

爾來、土耳其内に於て、基督教徒の虐殺さるるもの其の數を知らず、兎角する中に、土耳其國內は敵と味方の間牒が入り亂れて、互に秘策陰謀を廻らし、其のために宮殿までも、一種の伏魔殿と化してしまつたのである。が、それでも十九

世紀の後半頃までは、何人も土耳其に革命が起らうなどとは、思ひも寄らぬことであつた。と云ふのは、凡そ此の世の中に、土耳其人ほど變化を厭ふて、何時も往古に憧るるものはなかつたからである。

かるが故に、宮殿内に屢々革命は起つても、是等は多くの場合、僧侶に支持されて居るとか、或は外國人に、金錢上の援助を受けて居るなど云ふ類の、云はば官吏や、軍閥やの企てであつて、多數の民衆は、全然、與かり知らぬ有様であつた。それで「青年土耳其黨」など云つても、一般民衆とは、何等の係り合ひもなく、實際に於て愛國者など云はんよりも、寧ろ野心勃勃たる向ふ見ずの手合が多いのであつて、彼等の巨魁連は、歐米で教育を受け、民主政治をもつて、百弊を救治し得る萬能膏と、心得てる半可通の急進主義者と來て居るから、従つて彼等の運動が、鼻持ちならなかつたのも、已むを得なかつた。

五色の酒を飲んで、豫言者を漫罵したり、家長らしい頤髯を剃り落して、アメ

リカ印度人のやうに踊つたり、母國人の純朴な信仰を貶して、無神論を唱へたりする等、西洋人の惡癖のみを真似ようとして居るから、彼等の愚や寧ろ憫むべきである。

一體何時頃から、彼等の間に、斯う云ふ悪い傾向が、滲み込んだかは、漠然として一向判明しないが、按ずる所、一八七六年にアブヅル・ハミツドが最初の國會を開設した以後らしい。然しアブヅル・ハミツドが、國會を招集するようになったのは、言ふまでもなく、現代思^想に想觸れた土耳其の宗教學生が、コンスタンノブルに叛亂を起したことで、又た列強が土耳其内の基督教徒に、自治を施かせようとしたこととに、基因するものであるから、約まり、土耳其有識者の西洋かぶれは、全く時勢の賜物と云ふの外なからう。

さう斯うする中に、幾多の破壊主義的委員會が、土耳其帝國の各要地、即ちカイロ、スミルナ、ベールト、トレビゾント、トリポリ、ブルガリア、マセドニア並に多島海の諸島は、固より云ふまでもなく、遠く佛蘭西や英國あたりにまでも設置されたのを見ると、是等の背後に、數多くの隠れた手が、動いて居つたことは、想像するに決して難くない。

現に北米合衆國の如きは、進歩を増進するとの名目に隠れ、陰に動亂を教へ込むため（支那に對しても同様な手段を採つたが）、ボスホラスに「ロバート・大學」(Robert College)を設立し、又た英國のバックストン(Buxton)や、並に其他のお節介者達も、土耳其で旺に暗中の飛躍をなし、更に舊獨逸皇帝あたりも、バグダッドに涎を垂らした擧げ句、遽にサルタン(土耳其王)を、我が「親友」呼ばはりするようになった所を見ると、蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

また巴里にも、アーメド・リザを會長とする「オットマン聯合及び進歩委員會」や、エミル・エミン・アルスランを會長とする「土耳其シリア改革委員會」やが

あつた。佛國警視長官はリザを國外に、追放しようとしたけれども、佛國の言論界が、是れを阻止したので、今度はリザに賄賂を送つて、佛國を去らしめようとした。が、是れをもリザの拒む所となつたから、そこで已むなく彼の新聞に、發行停止を命じて、其の事務所を、陰謀と、叛亂と、盟約との、絶わざる苗床たるゼネブに、移轉せざるを得ざらしめた。

土耳其王の重大な缺點は、凡そ三萬人にも垂んとする有識な志士を、海外に放逐して、自らに對する陰謀を、益々深刻ならしめ、且つ完成せしめたことにあつたのだ。是等の志士が、足を海外に留めて見ると、今しも列強は、土耳其の分割に汲々とし、唯だ歐羅巴土耳其内なる何れの不平分子を、支持すべきかに關し、頭を悩まして居るだけだと云ふことに、漸く氣がついた。そしてブルガリア、東部ルーメリア、ボスニア、ヘルチエゴギナ等は、既に歐洲諸國の爪牙にかかり、マセドニアも亦た全く外人の侵蝕する所となつて居ることを、今更らがなら發見

して、大に驚いた。

土耳其の分解を欲せずして、其の發展膨脹を熱望する「青年土耳其黨」が、爰に忿然として憤り、猛然として起つたのも、決して無理ではなく、又た彼等が、此の時、サロニカに一つの秘密結社を組織したのも、敢て驚くこともあるまい。

其の組織等の詳細は固より知るに由ないが、名を「聯合及び進歩委員會」と稱し、共済組合に擬へて作つたらしく、支部を歐羅巴土耳其の各市に置き、後にはアナトリアや、シリアなどにも手を擴げて、見る／＼中に異常な發展を遂げた。指導者は神秘の雲に蔽はれて、知るべくもなく、命令は總て、「委員會」より來りて、絶対に服従されたが、然るに此の委員會が、如何様に組織されて居るやですら、會員の何人にも知られなかつたのであつて、會議を開く毎に、違つた議長が任命された所を見ると、各委員會が順番に其の任に當つたやうである。時しも列強は、コンスタンチノブルに國際憲兵を置いて居つたが、英國側が土

耳古兵を立派に訓練し行くのを見て、青年土耳其黨は大に心を勵まされ、是非とも軍隊を擁しなければならぬとの考へから、當時、マセドニアを占領して居つた第三軍團を、手に入れることに腐心したのである。此のことは、一九〇七年末にマンマと効を奏して、マセドニアの總ての兵士は、青年土耳其黨に欺を通じたから、今度は宣傳により、第六軍團をも、萬遍なく自家藥籠のものたらしむることが出来た。

是等の事情を、サルタンの政府が、一切御承知なく、つひ叛亂の起る間際までも、是れを否認して居つたことは、偕てもお目出たい話だ。

さう云ふ次第だから、サルタンの政府にとり、叛亂は全く晴天の霹靂の如く突發した。一九〇八年七月五日、マセドニア軍の一士官ニアジ・ペーは、先づ叛旗をレスナ丘上に掲げ、其の翌日、憲法を布告する旨の宣言書を、モナスチルの壁に貼りつけた。シエムシ・バシア將軍は叛亂を鎮壓するため、差遣されたけれ

ども、マセドニアの一士官は、白晝公然、徒歩にて彼の乗物に近づきつつ、彼を銃殺した上、悠然と引き上げた。其の後、ニジム・ペーは急遽、サロニカに派遣され、眼にも留まらぬほどの敏活な働きをして、首尾よく四十八名の叛徒を捕へ是等を繩付きの儘で、首府に護送する所であつたが、何うして隙を狙はれたものか、彼も大負傷をした。

それからエンヴェル・ペーは、サルタンよりの申出を斥けて、レスナ丘のニアジ・ペーに加擔し、又た「聯合及び進歩委員會」も公々然、叛徒と手を握り、お負けに以て来て、アドリアノール駐屯の第二軍團にも、背叛の兆が現はれ始めたから、該委員會は電報をサルタンに發し、彼にして憲法を認めずんば、第二及び第三の軍團は、一舉コンスタンチノブルを突かんと申送つた。けれどもサルタンは、平生の臆病にも似合はず、窮鼠却つて猫を噛むの態度に出で、直にオスマン・バシアをモナスチルに遣はして、一步も讓歩せぬ、と云ふ強硬な權幕を示す

と同時に、且つ叛徒にして歸順の意を表すれば褒美を與へん、然らずんば恐るべき刑罰を課せん、と威した爲め、オスマン・バシアは遂に銃殺されてしまった。

そこに、圖らずも一つの劇的な事件が起つたのである。「聯合及び進歩委員會」はマセドニアなるサルタンの代表者たるヒルミ・バシアに對し、本月（即ち一九〇八年七月）廿四日に、憲法を公布するか、然らずんば其の結果を甘受するか、しなければならぬ旨を傳達した。

是れに對する彼の回答は、「自分も其の運動に充分の同情を持つては居るが、残念ながらサルタンの代表者たる予は、勅命を待たずして、貴意に應ずることが出来ぬ」と云ふことだつたので、更に該委員會は、二十四時間の猶豫を與へるから、其の間にサルタンの勅命を得て、何分の確答をせよ、との旨を申送つたのである。固よりサルタンが、今更ら承服する氣遣ひもないから、十中八九まで、否な百中九十九まで、ヒルミ・バシアの首は、飛んでしまふものと、各人皆な期待

して、其の日の明け離れるのを待ち、群集はサロニカなる白聖塔（官舎）の周圍を取捲き、如何なる王命が、ヒルの唇から吐き出されるものと、固唾を飲みつつ待ち設けて居ると、事は餘りに意外で、「サルタン陛下が、憲法を土耳其帝國に御裁可遊ばされることになりました」と、云ふことを聞き、人々は唯だ茫然として、暫しがほごは口も利けない有様であつたから、固より萬歳を叫ばうとするものもなかつた。

斯くて萬事は、いよ／＼青年土耳其黨の思ふ壺に嵌まりかけて來たのである。其の結果は、後に述べようとして居るボルシエギズムにしても、亦たファシズムにしても同様であるが、今まで地底を潜つて、活動しつつあつた秘密結社が、初めて其の外被をかなぐり去つて、公然、地表に現はれ出るようになり、斯くて漸く其の正態を、公衆の面前に曝露したのである。そして「青年土耳其黨」などと銘打つて、ド偉い事業を仕出來した、恐ろしい陰謀團の指導者達は、定めし鬼

をも拉ぐ英氣潑瀾たる若者揃ひならんと思ひきや、多くは無能のため、懲戒免職に處せられたのを遺恨に思ふて、叛徒に與したヨボくの老朽士官であつたのを見た時に、世間は啞然として、言ふ所を知らなかつたのである。

其の後の、青年土耳其黨は、爲すことすること、兎角、多數土耳其人の期待に背くもの多く、動もすれば、世人の眼に餘る行動を振舞ひがちであつたから、そこで一九〇九年四月に、下士官の率ゐるコンスタンチノブル守備隊は、青年土耳其黨に叛旗を翻して、其の士官數名を斃し、將に政府を樹立しようとした。

是れを知つた青年土耳其黨は大に狼狽して、指導者の多くはサロニカに遁れ、彼等の部下もそれ〴〵に行衛を晦ましたが、此の時、例の「聯合及び進歩委員會」は、再び奥の手を出して、マセドニアの兵士に對し、今しも憲法が危機に瀕して居る旨を説いた爲め、急を聞いて、馳せ參するもの、數日の中に二三萬人（確實の所は不明）と稱され、兩軍はシシユリ（Shishi）附近で衝突し、互に入り亂れ

て、大に戦ふたけれども、衆寡敵せず、遂に勤王黨（即ち下士側）は、一敗地に塗れてしまつた。

是れがためサルタンは、讓位を迫られて、サロニカに幽閉され、爾來、土耳其の政權は、全く青年土耳其黨の手に掌握されたのであつて、彼等が土耳其を、今次の大戦に於いて、獨逸側に味方させたのも、豫ねての借款に報ゐんためであつたが、戦終りて土耳其は、一時由々しき難關に逢遇せざるを得なかつた。

それでもムスタハ・ケマル、パシヤが、希臘に打勝つた爲め、或程度の國權を回復したが、其の代り、ケマルが獨裁權を振ふようになつたので、爰に再び青年土耳其黨は、一九二三年に陰謀を企てた。けれども、結局、失敗に歸し、却つて一九二六年八月、黨の主要人物は、多くケマルのために、アンゴラで死刑に處せられたから、久しい間に互りて、多くの人命と財とを賭した革命の甘い美果も、唯だ獨りムスタハ・ケマル・パシヤの食ひ物になつた譯だ。

第三編 民族主義的秘密結社

第一章 希臘に於ける民族主義的秘密結社

佛蘭西革命の諸題目は、端なくも土耳其帝國を解體させることになり、尋いで海賊の後裔たる、所謂希臘人なるものにも、遠い過去の傳統を追回させる機縁となり、斯くて漸く獨立運動を、誘發するに到つたのであつて、十八世紀末に及び幾多の秘密結社が、希臘内に組織され、リガス (Rhigas) と稱する一歴史教授は、埃國の維納とトリエストで、亂を起したけれども、埃國のために捕へられて、土耳其政府に引渡され、一七九八年に銃殺されてしまつた。

それより暫く希臘人の獨立的野心も、鳴りを潜めて居つたが、一八一二年に到

り、表面上、希臘文學を復興させるためと稱して、外國及び希臘舊王室の補助を借り、「ミューズの友」會が創立され、後に到り、此の會は、土耳其の羈絆を脱するために、基督教徒を武装させることを、目的とする (Philiker) の秘密結社に發展した。此のヒリカー結社の棟梁が、何人であるやは、會員にも知れなかつたが、多くの人は、當時、土耳其内に革命の陰謀を廻らして居つた露西亞皇帝ならう、と見當を付けて居つた。しかし實際は、舊いビザンチウム(東羅馬帝國)皇室の一族で、ザールと極の仲好しだつたアレキサンダー・イブシランチその人だつたのである。

此の結社は、一八一八年に本部をコンスタンチノブルに移し、支部を希臘植民地の各地に置いて、手廣く軍事上の準備を進めて居つたが、一八二一年にイブシランチが、叛旗を掲ぐるに及んで、土耳其のために、却つて裏をかかれ、遂に彼は身を以て、埃太利に逃れ、此所で七年の刑に處せられた。其他の叛徒も、多く

捕へられて、處刑されたのである。是れと同時に、南部希臘と島々でも、一揆が相尋いで蜂起したが、是等も土耳其政府のために、次ぎ／＼に討伐され、巨魁の一人 Ohio は、劔の先きに吊された儘、火刑に處せられ、凡そ二萬の住民は、長幼男女を問はず虐殺され、其他の五萬人は奴隸として運び去られた。

此の事件は甚だしく文明國民の同情を喚起し、特に英佛露の三ヶ國は、是れに干渉することにより、一八二七年遂に土耳其艦隊を、ナワリナに撃破し、其のたゆめに希臘は獨立を獲得して、積年の志を遂げた。そして既に自らの目的を達したから、各秘密結社は一先づ解散したが、一八九四年に、クレート島の事變が、漸く深刻化して來たので、再び復活した。とは云ふものの、叛亂は一八二一年以來絶わす起りつつあつたから、此の間に於ても、多くの秘密結社は、勿論、裏面に於て、活躍し續けて來たに違ひない。

一八九七年に、希臘の政治家デリアンニス (Delianis) の政府は、各秘密結社

を糾合して、土耳其に對し、戰爭を賭し、其の後は、公式に解散したけれども、而も其の實體は、今尚ほ存在するものの如く、斯くて總ての希臘政府を、手古摺らせて居るやうである。

第二章 愛蘭に於ける民族主義的秘密結社

愛蘭人は神秘的で、詩的で、感じが早く、氣まぐれで、憂鬱で、且つ疑ひ深く、洵に以て外國人には譯の解らぬ、謎のやうな民族であつて、深く郷土を愛して居るかと思ふと、移住を好み、競技が好きかと思ふと、理論も好き、喧嘩早いと思ふと、機を見るに敏で、金儲けが却々に甘く、概して婦人は、頭からシヨールを被りて、眼と鼻だけを露出して居るあたり、回々教徒の妻女を偲ばしめるものがあるさう云へば愛蘭人は、他にも東洋人に似通ふた點が、少くないやうであつて、

彼等の間に、秘密結社が生まれ出たのも、蓋し彼等の然うした性癖からではなからうか。

クロムウエルとウイリアム・オヴ・オレンジとの壓制は、愛蘭人の間に、陰險な反抗心を喚起するに十分ではあつたが、然し始めて愛蘭に、秘密結社の記録を留めたのは、地主と異民族たる官吏とを、暗殺したり、且つ掠奪したりするため、一七六一年に創設された「白襯衣少年組」^{ホワイト・ボイズ}が嚆矢であつて、其の會員の總てが、白襯衣を衣服の上に纏ふて、身を扮した所より、此の名を得たのである。

佛蘭西革命によりて、英本國に對する、反感が刺戟された爲め、一七九一年、「愛蘭人聯合」^{ユニオン・オブ・アイリッシュ・ユメニ}が組織され、僅か一年以内に、百萬の會員を、總ての階級より糾合した。彼等の目的は、佛國の兇暴派と氣脈を通じて、愛蘭共和國を建設するにあつたが、程なくして、殺人、強盜、放火等を以つて、全國を脅かせたから、^{プロテスタント}新教徒は武装して、彼等に對抗した。其の後、一七九四年に、ウイリアム・オヴ・

オレンジの名に肖かる積りで、「オレンジメン結社」(Society of Orangemen)なるものが、舊教徒に對する新教徒の優勢を示すためとあつて、組織されたりけれども、蠻行、陰謀、欺瞞等、惡事にかけては、前者と何等の變りもなかつた。

オレンジメン結社は、王子や貴族やを包容する會員三十萬人と、支部二千とを有し、マンチエスターや倫敦や、並に北米合衆國やにまで、其の手を擴げ、多くの代議士を國會に送り、概して民權黨^{ホイッグ}を支持したのであつて、今日に到るまでも愛蘭の民族主義運動と、舊教徒の解放運動とに對抗し、合衆國に於ては「Royal Orange Institution」^{ロイヤル・オレンジ・インスティテューション}と稱されて、一九二六年に支部三百五十と會員三萬三千とを擁しつつ、多くの場合、^{クワイ・クワクス・クラン}KKK Klan と共同戦線を張つて居るやうである。

また一八五七年には、大佐ジョン・オマホネとミカエル・ドヘニーとにより、愛蘭の獨立を支持するため、合衆國內に「フェニアン友愛會」(Fenian Brotherhood)なるものが組織された。此の名稱は、愛蘭部族の勇士 Fene 或は Feinn (hood) なるものが組織された。此の名稱は、愛蘭部族の勇士 Fene 或は Feinn (hood) なるものが組織された。

り由來したとも言はれ、又たオツシアン傳説中の英雄 *Óðinn* より來たとも稱されて居るが、何れとも未だ判然しない。加奈陀、愛蘭、及び其他の英領植民地に普く會員を有し、加奈陀と愛蘭とを、英帝國より分離させて、是等を合同することにより、愛蘭共和國を作らうと計畫し、其のために、愛蘭で屢々内亂を起し、又た二度も加奈陀を占領しようとしたが、何れも失敗に終つた。

此に於いて、一八七二年以來は、餘程陰險な態度に變じ、無政府主義者の方法を採用して、暗殺を能事とするようになり、現に其の指導者の一人バトリック・フォードなどは、英國の各都市を灰にするために、一八七五年に秘密基金を積立てると同時に、且つ多くの暗殺隊や、爆弾隊やを組織したほどだ。そして彼等は、一八八五年に到るまで、愛蘭内は固より云ふまでもなく、又た倫敦、グラスゴー、リヴァプール、及び其他の都市に於て、絶えず公官廳を爆發することにより、頗る人心を不安ならしめた。

是れと同じく愛蘭の完全な獨立を理想として組織されたものは、*Sinn Féin* (我等のみの意) 黨であつて、一切の政黨に反對しつつ、「英國の危機は、愛蘭の機會」と云ふ舊い傳統を金科玉條として、屢々英國政府に楯を突き、自治制が拒まれるや、自分で政府と國會とを設置しようと試み、そして一九二〇年には、ウルスター以外の總ての地方官權を、支配するに到つたから、遂に英國政府も我を折り、一九二二年には、英國主權の下に、「愛蘭自由國」を認むるようになった。が、其の結果、愛蘭の商工業は、却つて沈滞し、そして其の繁榮は、全く南柯の夢にも等しいものになつて、愛蘭人の多くは、今しも臍を噛みつつある所だ。

第三章 波蘭に於ける民族主義的秘密結社

波蘭國の歴史と國民性とは、是れ亦た秘密結社の發生に、誂へ向きの苗床であ

つて、ナポレオンに對する神聖同盟は、戰爭を終熄するための戰爭と見做され、平和さへ到來すれば、直様、黄金時代を迎ふるやうになるものと、一般人から豫期されて居つたのである。其のために、不幸な波蘭も、國會が開設されたり、國民の軍隊や、司法や行政やが、施設されたりすれば、自然と幸福になるだらうとは、何人も期待して疑はなかつたのであるが、然るに波蘭は、平和が來ても、相變らず露西亞の羈絆を脱却したり、言論出版の自由を獲得したりするために、絶えず陰謀を廻らさなければならなかつたのだ。

大佐ルカシンスキーは一七七二年以前の狀態に、波蘭を引き戻さんがため、一八一九年に「共濟組合國民聯合會」を組織すると同時に、多數の入會者を得たのであるが、程なく露西亞より解散を命ぜられたので、直ちに略ぼ同じ人員と同じ目的をもつて、「愛國國民協會」を創立した。其の時の會員總數二十五萬人で内五千人は主として貴族と軍人だつたのである。是れと同じ頃に、同じ目的をも

つて、「現代騎士團」なるものが、學生達によりて組織されたけれども、忽ち露西亞政府の檢擧する所となり、指導者の多くは自殺した。其の後の陰謀は、一層秘密の中に行はれ、ギルナの「フィラレン團」(Philareten)など、其の中の最も活動的なものであつた。

それで波蘭は、表面上平穩に見えたが、其の不平黨は、一八二五年に露西亞の「十二月黨」(Decembrists)と相結んで、叛旗を翻へした爲め、二百人以上の波蘭貴族は、裁かれて後ち放免された。此の判決は、波蘭の民族主義者を、少からず有頂天ならしめたが、同時に又た露西亞皇帝をして、波蘭の不平を、即時、根絶しようとした。彼の兄弟コンスタンチンを總督に任命して、自らの一大決心を世に示した。が、偶々、一八三〇年に、佛蘭西七月革命の報傳はるや、革命思想は、惡疫の如く、波蘭の各地を襲ひ、其の年の末になつて、「騎兵旗手」並に其他の秘密結社が準備を整へ、人民も武装して蹶起し、兵隊も亦た彼等に加

擔すると云ふ有様で、此の機に乗じ、二十名の武装した叛徒は、先づ總督の官邸に闖入した。で、コンスタンチンにして、若し其の時國外に遁れなかつたならば彼は恐らく殺戮されたことだらう。

一八三四年に、共產主義思想を抱いたクナルスキー或は一名コーヘンと呼ばれた人により、瑞西に「青年波蘭結社」なるものが作られ、倫敦と巴里で、熱烈な宣傳を試みた。其の後、クナルスキーは大膽にも波蘭を訪れたので、直に捕へられて死刑に處せられた。

それからクラコウとポーゼンに、一揆が起つたが、是れも一敗地に塗れ、斯くて不満は、久しく各人の胸底深く秘められて居つたのである。然るに一八五五年アレキサンダー二世が王位に即くや、波蘭に自由を與へて、其の追放した陰謀者などを、放免したので、彼等は得たり賢しと、再び陰謀を續け、クリミア戦争に乗じて、秘密の「國民政府」なるものを樹立し、法律を發布したり、租税を徴

收したりして、組織的に露西亞政府當局者を惱ました。

が、彼等は是れでも尙ほ満足せず、一八六三年には、不法な戦争を露西亞に挑み、自らの秘密機關により、幾多の恐るべき暴行を働いたので、流石の温厚な露帝も、遂に業を煮やして、彼等を討伐したが、それでも秘密結社は、尙ほ絶滅した譯ではなく、單に今次の大戦前までは、比較的小康を保つて居るに過ぎなかつた。そして戦後に於て、波蘭は久しく憧れた自由を得たが、それも東の間で、今度は佛蘭西が宗主権を掌握し、一九二〇年に露西亞過激派は、將にワルシヨウを占領しようとして、波蘭人は再び溜息ためいきし始めたから、そろ／＼又た秘密結社活躍の好舞臺が、開展することだらう。

第四章 獨逸に於ける民族主義的秘密結社

マルチン・ルーテルの思想は、單に宗教界の單調を破つたばかりでなく、又た多くの小農夫、特に村の高利貸より虐げ抜かれて、貧苦の中に喘いで居つた人達の心をも、掻き亂すに與つて力あつたやうである。十五世紀末に到り、幾多の秘密結社が獨逸國內に組織され、就中、最も著名なものは、小農夫の草鞋を標章とするアルサス地方の「Bundschuh」^{フンドシュュー}と、ザルテムブルグ地方の「Conrad」^{コンラート}結社とであつた。

「フンドシュュー」の特殊な目的は、負債と、租税と、裁判とを、免除されることであつて、其のために、猶太人を虐めたり掠めたりすることを、日課としたのである。此の團體の首領たるハンス・ウルマンは、シュレットスタットの市長で彼は一四九三年の復活祭前週をトして、叛亂を起さうとしたが、遂に事露見して處刑された。けれども陰謀は、其の後も、極秘の中に運ばれて、總ての権力者を剿滅することを、目的とするようになり、本部をブルクサル近くの村に置き、夜

陰に乗じて、會員が集合し、半ば宗教的儀式の下に、互に信義と、秘密とを誓つた。

彼等の最も秘密にした計畫の一つは、貴族と僧侶を、悉く葬り去ることであつて、此の目的を達したる曉は、遊んでゐても、贅澤な生活が出来るとて、黄金世界の夢を結んで居つたのであるが、事は再び發覺して、一味のものは、多く絞殺され、頭目ヨスト・フリッツは、瑞西に逐電した。

其の後、久しく雌伏して居つたやうであるが、フリッツは再びアルサスに潜入して、新しい「フンドシュュー」の組織に着手し、彼の門徒は、夜間森林中に密會して、恐ろしい血盟をしたものだ。それより此の運動は、アルサス、バーデン、ウルテムブルグ等に擴大し、一五一三年の秋は、一大叛亂を起す手筈であつたが失敗の歴史は三たび繰返されて萬事水泡に歸し、フリッツは又も瑞西に遁れた。がウルテムブルグの殘徒は益々結束を固うし、或陸軍大尉が牛耳を握りて、彼等

に或程度の訓練を與へ、又た卓れた知能を有する職人連は、小農夫と相結んで別に「コンラード」結社を組織した。孰れも、際立つた重大な叛亂を起すことは出来なかつたが、而も屢々動亂を計畫して、人心に脅威を與へ、そして一五二四年乃至二五年に於ける百姓戦争の地盤を築いたのである。

一八〇七年のチルジツト條約は、普魯西を佛蘭西の膝下に、跪かしむることになつたので、是れに反抗しようとして、幾多の秘密結社が生まれた。其の中で一番知られたものは「ツグエンブンド道德聯盟」(Tugendbund)であつて、ケーニスベルグに創立され、會員は將校、官吏、貴族、教授、並に其他名士等、慎重な吟味を遂げた上で、始めて入會を許され、最初は獨逸の共濟組合員より、多少の援助を受けたが直ちに獨立して、單獨行動を採るようになつた。けれども暫くにして、此の「ドイチュン道德聯盟」は、ナポレオンの猜視する所となつた爲め、一八〇九年に解散を命ぜられた。

それより一八一三年に、佛蘭西はライプヒチで一敗地に塗れたが、而も獨逸に於ける佛蘭西の精神的感化は、尙ほ牢乎として抜くべからざるものがあつたので依つて獨逸の各種結社は、互に大同團結を遂げて、「ルエゲル懲戒員」(Rueger)なる役員を任命することにより、此の精神的感化を根絶しようとして試みた。が、是れには、反對するものもあつたし、又た政府も餘り喜ばなかつた上に、丁度、そこへ以て來て、獨逸の諸邦と、普魯西との間に、盟主争ひなどがあつたりした爲め、互に反目を事とするようになり、斯くて思はしい活動をする事が出来なかつた。其の結果、ホフマンと稱する不逞な一法律家により、「ホフマン聯盟」(Hofmannsche Bund)なるものが組織され、普魯西の覇權のために、可なりの活動を續けたらしいが、其の結果思はしからず、遂に一八一五年十月解散するの已むを得ざるに立ち至つたのである。

是れより先き、一八一四年エーナに、學生の一團が、「ウエーレンシャフト防禦團」(Wehrschafft)

なる一種の國民軍を組織し、瞬く中に全獨逸に擴がつたが、彼等の思想は、佛軍が獨逸に侵入して以來、餘程變化して居つたので、一八一七年の宗教革命記念日に乘じ、一大示威運動を開始すると同時に、ルーテルの故智に倣ひ、露西亞の史家 Kotzebue^{コツチエフ} の普魯西史や、並に其他多くの官文書類を篝火に投じた。

此の事に鑑み、爾來政府は、學生の結社を、禁止する方針を採つたが、其の結果、彼等をして益々秘密に、其の活動を、殆ど總ての高等學校に擴大せしむるばかり。斯くて一八二一年には、獨逸の聯合と、代議政體とを、促進するためとあつて、更にエーナの學生達により、「青年聯盟」(Junglingsbund)なるものが組織され、其の他にも、幾多の秘密結社が、熱烈火の如き青年達により、雨後の筍のやうに生み出された。

一八三二年乃至三三年に、彼等青年學徒の中に、兵士を銃殺などして、無期徒刑に處せらるるものが多くあつたので、其の後、特殊な法律が布かれ、學生は一

切の實際運動に加盟出來ぬことになつたが、それでも尙ほ一八四八年の革命的動亂には、目覺ましい活躍を試みたらしい。爾來、年を閲すること七十有餘、彼等の消息は杳として聞けなくなつたのであるが、按ふに何等かの理由で、其の活動を中止して居るのであらう。

そして獨逸は、今次の大戦で、城下の誓ひをするようになり、昨日までは覇を世界に唱へた強國が、今日は武装まで解かれる惨めな境遇に落ちぶれて見ると、獨逸人たるものの何人も、其の餘りな激變に、一時茫然として爲す所を知らぬ有様であつたのだ。が何時までか斯くてあるべきにあらねば、漸く氣を持ち直して先づ彼等は自らの生存と財産とを保護するために、自衛團を組織するようになり是れが次第に緒に就くに及び、應て復讐と再征服とを、思ふようになるのは、眞に無理からぬことであつて、又た其のために、幾多の秘密結社や陰謀團やが、今頃ウヨウヨ獨逸國內に、萌れ出るようになつたからと云つて、是れも強ち不思議

でない。

バヴリアの「自警團」(Einwohnerwehr)と、獨逸の各地に存する「オルゲン
ユ團」(Orgesch)若くは「エツシエリヒ團」(Etscherich)とは、本來秩序を維持
するために組織され、特にバヴリアの自警團は、ミューニヒに勞農共和制が施か
れようとしたので、是れに對抗する必要上、無給の篤志家を募りて、是れを組織
したのであつたが、兎角、小人は倔強な武器を手にすると、亂に及び易いもので
あるから、斯くて日を経る中に、幾多の陰險な計畫が、自然と彼等の間に、醸さ
れるようになったのも、考へて見れば、必ずしも咎むべきことではないやうであ
る。が、英佛協商國側は、彼等を解散させるよう獨逸に要求し、獨逸の社會民主
黨も、亦た自らの無茶な計畫が、彼等のために、邪魔されんことを恐れて、協商
國側を支持した。

其の結果、是等の自警團は、幾多の小さな組に分裂すると同時に、又たそれぞ

れに違つた秘密な方法や、相反する目的やを有するようになりて、彼等の中の一
部は、帝政を復活することに熱注し、更に他の一部は、自分の私利を計ることに
専心すると云つた状態になり、斯くして一九二三年バヴリアに、獨裁政治を施か
うとする企てさへ起つたのである。そして獨逸帝國の殘骸は、今しも陰謀、其の
逆陰謀、叛逆、暗殺等、無數の忌むべき蛆虫共から侵蝕されつつあるから、獨逸
の仇敵は外にあらすして、寧ろ内にあるとも云ひ得るだらう。

C團(Cは大尉(Ehrhardt)の渾名たる Consulの頭字)は、犯罪的陰謀の嫌
疑を受けて告發され、確實な證據がなくして、放免はされたものの、未だ以て世
人の疑惑を、解くには到らなかつた。それから「勞働民軍團」や、「黒色國防團」
などの活動も、一九二六年秋ランツベルグで、國事犯の公犯に附された結果、多
くの暗殺事件が、發覺した模様である。彼等の殘忍な仕方は、犯罪史上、未だ曾
て類例がないと稱されたほど慘鼻を極め、叛亂のために、共產黨に武器を供給し

たと云ふ疑ひで、多數の叛逆者、就中、曹長ガヂクなどは、慘殺されたい。

是等の犯罪が政府當局者と、或諒解の下に、企てられたことは、該民軍團の首領シュツツ中尉自ら、自分は普魯西の内務大臣、及び國防大臣の指圖の下に行動し、又た自分の部下は、波蘭の侵入に備へんため、國防制服を着けて、秘密勤務に服した、と告白せるのを以ても、是れを知るに難くない。そしてシュツツ中尉は、案の條、無罪放免と云ふことになつたが、唯だ彼の部下クラップロート曹長だけは、陪審官から「獨逸の善良な愛國者が、叛逆者に對して、義憤を漏らすのは、正當なことだ」と、慰撫されつつ獄に下つた。

此の裁判の結果は、大方の非難を招き、又たエルツベルゲルとラテナウの殺害は、民衆に少からぬ不快の印象を與へ、そして一般に法律は帝政主義者を迫害して、共和主義者を庇護するものだから、決して恃むに足らぬ、と云ふ觀念を抱かせるようになり、其のために、「帝政派鋼兜組」など云ふ勤王的結社の活動を緊

張せしめて、一九二七年六月共和派の「金旗組」と、砲火を交へしむるに到つたのである。斯うなつては、他の無産階級の人々も、ちツとしては居らず。徒に妄動して、法律秩序を紊すこと、一通りでなかつた。

また共産主義者以外の、總ての過激主義者は、互に糾合して、「黒赤金旗組」(Richtsbanner Schwarz-Rot-Gold)なる團體を、マグデブルグに創設したが、此の團體は、他の無責任な多くの結社に較べると、餘程、節制があつたやうだ。

共産主義者の間にも、幾多の秘密結社が組織されて居り、其の總ては、露西亞の過激派から、金錢上の支持を受けて居るのであつて、特に「共産主義青年」と稱する秘密結社の如きは、無遠慮極まる行動を敢てし、又た「無産者百」の如きは軍隊式に組織されて、豊かに武器を支給され、「赤色戦線闘士組合」と「赤色青年突撃隊」との支持を受け、彼等の總ては、間諜も勤めれば、其他の秘密勤務に服することをも、辭するものでない。

此に於て、協商國側の人々の宜しく牢記するを要することは、獨逸の無産階級は平和的に商議するとか、或は國會に代議士を送るなど云ふこと位では、最早や満足するものでなく、寧ろ手つ取り早く、暴力を用ゐようとのみ、考へて居るのであるが、今日のやうに獨逸政府が、武装を解除されて、手も足も出せないようでは、獨逸の産業界は、何時までも不安を免れまいと云ふ一事である。

一九二三年十一月九日、「ヒットレル・ルーデンドルフ」の暴動は、多くの秘密運動が、如何に恐るべく、且つ寒心すべきものであるかを曝露し、獨逸は今や各種秘密結社の温室でもあれば、又た是等の盛衰興亡を研究するための實驗室ともなつて居るのであつて、一九二三年四月バヅリアに、總ての獨逸軍事團體を聯合して、「愛國戦闘聯盟」なるものが設立され、其の參加團體として、主なるものは、(一)、公的に「獨逸國家社會主義労働黨」、通俗的に「國家社會主義黨」の突撃隊として知られたヒットレル (Hitler) 軍團、(二)、上部シレジア騒動の

際、一箇師團に相當する人員を動員し、且つ其の組織を完うしたる「Oberland同盟」^{オーバーランド同盟}、(三)前者と同じ程度の組織を有するスレームベルグの「Reichsflagge」^{ライヒスフラゲ}等であり、約まり、ヒットレルとルーデンドルフとの差金により、普魯西の利益を計ることを、目的とするものに外ならぬ。

獨逸の國家社會主義黨は、自ら普通の一政黨に過ぎぬと公言しては居るが、多くの神秘的な方法を用ゐたり、又た多くの無責任な支部を、發展させたりしてゐる所を見ると、何うしても是れを一つの秘密結社と見做すの外はあるまい。そして國家社會主義^{ナチオナル・ソシアリズム}なる語は、恰も國家國際主義など言はんが如く、矛盾極まる語だとして、一部の人々から、擲論されたことすらあるほどだが、それでも尙ほ斯くの如く呼んでゐるに對し、多くの識者は、社會主義なる語を提示して、過激主義者を釣る算段だらうと云ふことに、略ぼ意見を同じうして居るやうである。

第五章 汎スラヴ主義を奉ずる秘密結社

156

總てのスラヴ人の民族的感情に訴へて、露西亞の勢力を、歐羅巴及び亞細亞に擴げようとする思想が、初めて萌したのは、カザリン二世とアレキサンダー一世の治世からであるが、然し當時に於ては、主として宗教、文學、音樂、及び美術に、力を限定したやうであるから、各スラヴ人種國の陰謀家等が、様々な學會や結社やを、政治上の目的に利用し始めたのは、一八四八年以後のことであつたのだ。

最初は、スラヴ學生達の文學會や科學會として、呱呱の聲を上げ、本部を匈牙利のプレツスブルク、即ち現在のチエコ・スロヴキアのブラチスラウに置いて居つたのであるが、一八六〇年頃に到り、益々、政治上の色彩を帯びるやうになつ

て、ダニユーブよりアドリアチック及び多島海に互る、セルビア、クロアチア、ブルガリア、ボスニア、ヘルチエコ并ナ等に、會議を開いたり、支部を設置したり、新聞やバムフレットを、配布したりしたので、埃太利、土耳其、並にセルビア等の政府は、鬼胎を抱き、法規をもつて、是れを制止しようとしたが、毫も其の甲斐なかりしのみか、却つて彼等の運動を、一層陰險に且つ取締り難くするばかりであつた。

當時のセルビアは、比較的獨立した國家であつて、唯だベルグラードに、土耳其の守備兵が、駐屯して居るだけであつたのだ。一八六〇年にセルビアの解放者とも稱すべきミロシユ・オブレノキツチ歿して、其の子ミカエル後を襲ふたが、是れより先き、彼等父子は、其の競争相手たる、カラゲオルゲ并ツチ家の陰險と篡奪とにより、久しく流謫の慘苦を嘗め、そして漸く再び天日を仰いで、南面することが出来た次第であるから、此の間に處する父子の苦心は、實に一通りでない。

157

かつた。が、それにも拘らず、彼等は共に能く善政を施いて、國民一般の等しく景望する所となつた。特にミカエルは、我儘な國會を抑わつて、國家の地位を高めたり、又た國民憎惡の焦點となつて居つた土耳其守備兵を、驅逐したりした爲め、國民の信頼を、一身に鍾めた觀があつた。

それ斯くの如く、ミカエルの人望、大であつたに拘らず、尙ほ一八六二年六月ベルグラードが砲撃さるるに及び、人心一方ならぬ不安に陥つたのは、云ふまでもなく、當時、一部の賤々者流の間に、「青年黨」(Omładina)と持て囃されて好評噴々であつた汎スラヴ主義秘密結社が、影で糸を引いて居つたからである。元來、此の結社は、陽に自らを汎スラヴ主義者と公言しながら、陰に露國皇帝の傀儡となりて、セルビアの王位を窺察して居つたアレキサンダー・カラゲオルゲギツチの手先きに使はれ、露西亞より金錢の補助を受けつつ、何時も動亂をたくらんでゐた札付きのものであつたから、彼等の一味が、ベルグラードを騒がした

からと云つて、今更ら驚くにも當らぬ。

で、ベルグラードに砲撃の開始された日の數日前より、早くも流言蜚語が紛々として傳はり、人心恟々たるものであつたが、是れは勿論「オムラヂナ黨」が、故意に企てた仕業であつて、其の後も、彼等は絶えず陰謀を廻らし、遂に一八六八年六月、ベルグラードを距る二三哩のトプチデル公園に於て、ミカエルを暗殺するまでに増長した。下手人は三名で、何れもオムラヂナ黨の會員であり、アレキサンダー・カラゲオルゲギツチを、セルビア國王たらしめんために、企てたのであつたが、軍隊が依然オブレノギツチ家(即ちミカエルの血統)に、忠誠の意を表した爲め、彼等の計畫は、全く水泡に歸した。

巴爾幹地方に於けるオムラヂナの活動を理解せんと欲せば、先づ露西亞が其の後押しをして居つたと云ふことと、並に露西亞帝國主義の爪牙となることを拒んだ一切のスラヴ國、若くは其の主權者は、露西亞のために酷い目に會はされたと

云ふ二つの事實を、豫め考慮に入れなければならぬ。一八七六年、露土戦争の前衛戦として、ボスニアに一揆が煽動された時、セルビアとモンテネグロは、土耳其を攻撃するよう、露西亞より説得されたけれども、セルビアが是れを肯んせなかつた爲め、露西亞は伯林條約に於て、ボスニアを奥太利に割譲しながら、汎斯拉ヴ主義に基づき、ブルガリアをセルビアに譲與しようとはせず、却つて獨立國たらしめて、暗にセルビアを懲罰したのである。

此に於て、セルビア人の憤激遣るかたなかつたけれども、オムラヂナは露西亞のために制せられて、敢て何事をも企てようとはしなかつた。

然るに、ブルガリアの新王アレキサンダー（バツテンベルグ）は、露西亞の傀儡たることを厭ふて、一八八五年、從來、土耳其に隸屬して居つた東部ルーメリアを併合せんとしたから、そこでオムラヂナは、直に活動を開始し、一八八六年八月、一隊のオムラヂナ結社員は、眞夜中に乘じてブルガリアの宮殿内に闖入し

王を攫つて露國に同行した。此の時、王の精神が如何ばかり混亂したかは、放免された際、露西亞皇帝に卑屈な電報を發して、自らの讓位を申出でたのを以ても是れを察するに難くない。

しかし彼の後嗣フェルヂナンド王は、汎斯拉ヴ主義者の氣受けが、餘り好くなかつたので、露西亞は彼を承認することを拒み、他の列強をも説いて、又た同一態度を執らしめたのである。其の間に、オムラヂナ團は殆ど毎日の如く、王を暗殺しようとい陰謀を廻らしたが、沈着なる王は少しも騒がず、泰然自若として、巧みに萬難を乗り切る策を講じた。

斯う云ふ風に、一日として安き心を持たなかつたのは、單にブルガリアの王室ばかりでなく、又たセルビア王ミランにしても、同様に同じ秘密結社より惱まされ通しであつて、お負けに閨室、財政、政治等に關する雑多な難問題が、容赦もなく彼の身邊に蝟集し、是等を切り抜けるために、多少なり専斷な措置をすれば

益々、不人気を増すばかりなので、斯うなつては破れかぶれ、最早や彼は、單に自らを暗殺しようとする目論で居る人々を罰しただけでは満足出来ず、進んで自らに反対する一切の人々を捕へて、彼等を死刑に處するか、或は無期徒刑に處するかの外はなかつたのだ。

で、多くの反対派（其の總ては多分オムラヂナ團員）は、獄内で苦打たれたり餓死したりしたが、ミランはオムラヂナ結社員たる是等の反対派を、單に虐殺したばかりでは満足出来ず、更に彼等の墓の上に、十字架を掛けることさへ堅く禁止した。是れほどの暴政を敢てしても、尙ほ且つ政權を維持することの出来たミランの手腕は、全く驚嘆に値するものであるが、それでも南風競はず、遂に一八八九年三月には、流石の彼も、セルビアの王位を去らなければならぬ羽目になつた。

そこでオムラヂナの隠れた手は、其の後釜に、ピーター・カラゲオルゲキツチ

を据ねようと、書策をさく／＼怠りなかつたのであるが、色々な事情より、當年とつて僅に十歳のアレキサンダー・オブレノキツチが即位し、其の三人の攝政中、急進派たるリスチツチが、主として政治を左右することになつたのである。彼は劈頭直に急進派内閣を組織させたが、是等の急進派閣員の總ては、オムラヂナの團員であつたに拘らず、リスチツチは自らの權力を恃んで慢心の氣味があつた爲め多くの國民は固より云ふまでもなく、又たオムラヂナ團よりも嫌はれた。而已ならず、彼はアレキサンダー王をも蔑にしたので、王よりも漸く疎んせられ、遂に攝政職を免せられた。此の時、セルビア國民は、王の英斷を聞き、軒毎に國旗を掲げて、悦び合つたと云ふことだ。

それよりアレキサンダー王は、侍従ドキツチに内閣組織を委任したが、此の男も亦たオムラヂナの一員として、リスチツチにも劣らぬほどの急進主義者であつた爲め、施政上、餘程の難局に立つて居る（と云ふのは、急進主義者の總ては、

租税の支拂を否認したから)中に、間もなく死んでしまつた。丁度、其の時分、貧窮と追放との境遇に、悶々として居つた父王ミランは、自ら再び實權を握らんと欲してベルグラードに歸り、大に計畫を廻らしつつあつたが、甘く行かない所から業を煮やし、更に取れるだけの金を懐中にして、漂然、行衛を暗ました。

ミランは平素埃太利を、自分の保護者とも、亦た勘定方とも、心得て居つた所より、埃太利にあらずんば、夜も日も明けぬほどの埃太利最負であつたが、是れに反し、彼の室ナタリーは、露西亞の一大佐の娘なので、人情上おのづから露國に戀々たらざるを得ない。さう云ふ事情から、ミランと彼の妻とは、單に家族的に不和であつたばかりでなく、又た主義上でも氷炭相容れない間柄であつた。

そして本來、汎スラヴ主義を奉せるオムラヂナが、埃太利最負のミランに含む所あつたのは、固より當然のことであるから、斯くて一八九九年七月、其の團員の一人クネゼキツナを使懸して、ミランを暗殺せしむることにより、汎スラヴ主

義を阻止する邪魔者を、一掃しようとして企てたのも、亦た必ずしも怪むに足らぬ。が、然し萬事は鴟の嘴と食ひ違ひ、露西亞及びオムラヂナ團の夢は、何時、満たさるべしとも想はれなかつた。と云ふのは、折角、手頼りにしたアレキサンダーにも、何となく影が薄く、且つ彼と彼の令室ドラガとの間には、未だ一人の後嗣さへも出来なかつたからである。

アレキサンダー王と彼の室ドラガとの間には、眞に小説の材料にでもなりさうな、面白いロマンスがあるけれども、其れを説くは本書の主旨に悖るから、爰では割愛し、吾々は單に彼等が、世にも憫れな且つ慘たらしい最後を、遂げたこと云ふことだけを一言して、筆を進めなければならぬ。

却説、平素窃にセルビアの王位を、窺窺しつつありしピーター・カラゲオルゲキツチは、自らの唯一の競争相手たるアレキサンダー王及び妃の死を聞いて、取るものも取敢わず、ゼネヴの流浪より母國に歸りて、直様、王位に即き、積年の

志を遂げた。が、勿論、一日一刻として安き心もなく、寢室の戶外には、何時も
數人の瑞西護衛兵を張番させ、又た室内にも二名の番兵を置き、そして遣る瀬な
い憂悶を散ずるために、彼は常にブランデイの盃を、手放さなかつたと云ふから
其の他は推して知るべしであらう。

それから舞臺は一轉して、アレキサンダー王を暗殺した弑逆者の一味は、首尾
よく其の野望を果たしたから、今やセルビアの執政者となり、豫ねての露西亞の
恩顧に報ひんため、暫く其の番兵たる一役を、勤めては居るものの、固より是れ
位のことでは、満足の出来る彼等でないゆへ、機會だにあらば、大きな戦争を惹起
して、往時の一帝國を盛り返さんものと、果敢ない夢に、虎視眈々として居つた
のである。想へば今次の歐洲大戰なども、舊い彼等の夢の結果でなかつたことを
誰か斷言し得るであらうぞ。

モンテネグロは一七七三年時分までも、南部スラヴ（即ちユーゴースラヴ）帝

國復活の一心核をなすものと見做され、此の國民の勇敢と、此の國の地理的境遇
とは、一千年の間も、獨立を維持して居つたのであるが、遂に土耳其帝の併呑す
る所となつた。是れより先き、露西亞はモンテネグロを唯一の友國と考へ、窺に
期する所があつたけれども、一八九七年に其の必ずしも信頼するに足らぬことを
感知するや、爾來、是れを膺懲することに腐心し、切りにモンテネグロの青年を
煽動して、革命を起させようと企てた。其の結果、^{スラヴ}Slovenski Jug^{ザツク} と稱するオム
ラヂナ同様な秘密結社が組織されて、若い學生達は多く是れに加入し、「緑の花
環」と呼ぶピア・ホールを集會所として、旺に陰謀を廻らしたのである。

一九〇七年にモンテネグロのニコラス王及び彼の一家族を、チエテンエ市で爆
殺しようとする陰謀が発覺した。此の計畫に、セルビアの政府當局者が加擔した
ことは、クラグゼヴツの國立造兵廠より、爆彈を各學生に配分したのでも瞭かだ
あつて、チエテンエの爆彈陰謀が失敗した後に、セルビアの陰謀組は、暫く力を

マセドニアの「Komitajis」團（一部の士官によりて統率された官許の暴力團體）と協せ、相變らず不逞な行動を敢てしつづつたのであるが、一九〇八年に埃太利が、ボスニアとヘルチエコギナをと、併合するに及び、南部スラヴ地方に、期せずして憤懣の聲が湧き起つたには、埃太利を憎ましむる恰好の宣傳材料として、彼等は此の上もなき僥倖と打ち悦んだ。

丁度、其の頃に、セルビアの陰謀組は、コミタヂス團を離れて、自ら公然と、「國防會」(Narodna Odbrana)なるものを組織したが、單に暴力を加へるぐらゐでは、餘りに手緩しとあつて、一九一一年に、彼等は「國防會」を、「決死同盟會」(Ujedinjenje ili Smrt) 一名、「黒手組」と改稱すると共に、又た其の實質をも變へた。本部をベルグラードに置き、暗殺しようと思ふ人に、先づ死の宣告を下し、それから徐々實行に取掛つたのであつて、各會員は「自らの個性を失ふ」誓約をしなければならなかつた。其の内容は、略ぼオムラヂナの其れに類し、暗室

内に於て、神秘的な入會式を行ひ、本部より覆面の人が、突然現はれて、一本の蠟燭、十字架、短刀、連發拳銃を表象せる黒布を机上に置きつつ、芝居がかつた様々な式をなすのである。

そして歐洲大戰前及び戰時中に、此の組合員の爲せる行動は、全く言語に絶するものがあつたのであつて、彼等は愛國を看板にして、強盜、暗殺、隱密等なざるなく、團體のためとあれば、身を賣り、友を裏切ることをも意とせず、特に埃太利を活動舞臺として、荐りに慘劇を演じたのである。歐洲大戰の近因となつた Sarajvo の出來事なども、全く其の一齣に外ならぬ。

此の出來事は、有らゆる意味に於て、何人も知つて置くべき事柄と思ふから、左に其の經緯を、少しく述ぶることにしよう。セラゼボで埃太利皇太子フランシス・フェルヂナンドを暗殺したのは、プリンジツブと、ネドゼルコ・チャブリノキツチと、並にグラベズなる三人の少年であつて、何れも二十歳未滿の肺病患

者であつた。彼等は何うせ長命出来ぬことを知つてゐたから、何か素晴らしい仕事をやらせて、世間を唾つと言はせ、そして自分を有名にしようとする淺ましい考へであつたのだ。何れもボスニア出身の學生であつて、「青年ボスニア」と稱する一秘密結社に加盟し、例の「國防會」からも幾分の支持を受けて居つたらしい。一體、「青年ボスニア」なる結社は、露西亞過激派の感化を受け、埃太利で破壊主義鼓吹の新聞を發行して、各學校内に陰謀の種子を蒔くのを、主要なる役目として居つたものである。

プリンジツプは感情的な激昂し易い、且つ精神と肉體共に病的な少年であつてセラゼボを去る以前、ダニコ・イリツチなる人の學校に在學し、此の人物から、殺人の動機を吹き込まれて、遂に犯罪を敢行する氣になつたらしい。で、裁判官の前に立つて、プリンジツプは眞にしゃア／＼たる態度で、「私は學問をしようと思つて、ベルグラードへ参りましたが、一文無しになつて、借金で首も廻らぬ

ようになつた爲め、此所に来て暗殺するようになりました」と、犯罪の徑路を陳べて居るのである。

またネドゼルコ・チャブリノキツチは、三十年間も埃太利の間牒を勤めた者の子で、彼も貧乏のために、殺人罪を犯すようになつたらしい。彼は主として社會主義者や無政府主義者に使はれて、活版職工になつて居つたが、決して同一活版所に長く留まらうとせず、能くストライキに加擔し、其の行動や亂暴で、自分の理想に反する者なら、何人でも殺してやる、と云ふのが彼の口癖であつた。埃國皇子が近々セラゼボを訪問なさる、と云ふ記事を掲げた新聞を、例の「緑の花環」パーで、プリンジツプに見せたのも彼であつたのだ。斯くて彼等は、セラゼボに行つて、皇子を殺さうと云ふことに、協議を整へたのであつた。

グラベズは天主教宣教師の子であるが、宗教をお伽噺か何ぞのやうに心得て居つた不眞面な少年であつて、彼は平素常に「埃國皇太子のやうな人間を、活かし

て置いてはならぬ」と、口走つて居つたとか云ふことだ。

此の種の言が、何時としもなく、ベルグラード全部に、電氣のやうに傳へられて、直に暗殺團體の耳にも這入り、彼等は是れを絶好機會に、自分の利益と「大セルビア」の利益とを、同時に増進する爲め、爰に流血の慘事を、敢てしようとの逆心を懷くようになったのである。

此の暗殺團の中心人物は、名をドラグチン・ヂミトリゼキツチと呼んで、「セルビア總參謀」の知能部長を勤め、黒手組の評議會では通稱「^{アピス}Apis」として知られた剛の者であつて、セルビアの史家スタノゼキツチ教授の言によれば、「彼は冒險、危難、秘密會合、及び神秘的の行動を好み」、黒手組創立委員の一人タンコシツツ大尉と腹心の人として、此の社會では二人となき親分肌の人物であると云ふことだ。

黒手組創立の年なる一九一一年に、ヂミトリゼキツチとタンコシツツは、フラ

ンシス・ジョセフ皇帝か、或はフランシス・フェルデナンド皇子かを、暗殺しようとする手筈を決め、其のために、結核病患者のジーポー・ゾヴノキツチなるものを維納に送つたが、其の後、彼は杏として音信が絶わつたので、一九一四年二月に、彼等はブルガリアの革命秘密結社と通謀して、フェルデナンドを暗殺しようとして、又た一九一六年には、コルフに人を派して、希臘のコンスタンチン王をも、殺さうと企てた。

其の後、タンコシツツが、ヂミトリゼキツチに向ひ、ブリシジツプ及び其の友人に、堯皇子を暗殺するよう言ひ含めた、と報告すると、ヂミトリゼキツチは極めて手軽に、「それは結構だ、君は彼等に武器の使ひ方を教へて上げなくてはならぬ」と、答へただけであつたが、此の事が、遂に世界的の大戦にまで發展しようとは、神ならぬ身の、固より知る由もなかつたであらう。

タンコシツツは、ヂミトリゼキツチの言ふた通りに行ひ、且つブリシジツプの

舊師ダニロ・イリツチの計畫に基づき、犯罪を決行するよう、彼等三人に手筈をも教へたのであつて、ベルグラードよりセラゼボーまでの旅行は、デミトリゼキツチの舊い仲間の一人で、現にセルビア國營鐵道に勤めて居つたミラン・チガノキツチの計らひで、有らゆる危険を冒しつつ、彼等の中の二人は一緒に、一人は別の道を取つて、辛やくセラゼボーに到着するや、プリンジツプは、舊師ダニロ・イリツチの許に身を寄せ、グラベズは父の宅に潜伏し、斯くて別途により、遅ればせ乍ら到着したチャブリノキツチと共に、埃國皇子の到來を、今や遅しと待ち詫びて居るのであつた。

恰も其の日は、夢の如く果敢なかつたセルビア帝國の運命を、幾世紀の間も封じ去つた有名なコソボ戰の悲むべき記念日たる六月十五日であつた。此の痛ましい神聖な日を選んで、異民族たる専制國の代表者埃國皇太子が、態々、ボスニアの首府（即ちセラゼボー）まで、華美な仰々しい行列を見せつけに來ようとは、

何人が觀ても、不謹慎な仕打と評するの外あるまい。果せるかな、由々しい慘事を惹起すことになつたのである。

イリツチが總ての準備を整へ、犯罪の手筈は、規則正しく着々と進行した。彼は埃皇子と其の妃が、通行する筈になつて居つた道順に、少年達の侍合せる場所までも、自ら選定したる上に、且つ爆彈を投げた後、直に服用するようにと云つて、一種の劇藥までをも、彼等に與へたけれども、調査が弱過ぎた爲め、彼等は苦しんだだけで済んだ。埃皇子と其の妃は正しく暗殺されたが、暗殺者は前にも言ふた通り、何れも未丁年者たるの故を以て、二十年の懲役に宣告せられ、三年を経過せざる中に、總て肺病で獄死した。ダニロ・イリツチ初め、其他の連累者等も、悉く裁かれて罪に問はれた。

デミトリゼキツチの證言によれば、セラゼボーの暗殺は、元來、アレキサンダー・カラゲオルゲキツチの教唆に係かり、黒手組より復讐されるのを恐れて、ア

レキサンダーが自ら「白手組」なる無頼漢のみの秘密結社を組織した、に基因すると云ふことであるけれども、其の眞偽は固より保證の限りでない。が、少くとも露西亞政府が、セラゼボー事件に關係せることは、隠れもない事實であつて、現に該事件の起つた數日前、デミトリゼキツチはベルグラード駐在の露國公使館附陸軍武官アルタマノフと會談し、數日後を待つよう言ふたさうである。其の後、アルタマノフは毎日デミトリゼキツチと會見し、黒手組へと云ふて八千法を與へ、又た開戦の際に、露西亞はセルビアを支援せん、との言質をも與へたと云ふことだ。

露西亞が過激派の手に落ちて、アルタマノフが其の職と財産とを失ふや、直ちにセルビア政府は、彼を救援したのを以ても、此の間の消息を窺知するに足るであらう。

佛蘭西も亦たセラゼボー事件の連累者なり、との非難を受けた。實際、一九一

四年一月頃に、フランシス・フェルヂナンドの暗殺を目論む密會が、屢々、南部佛蘭西のツールルス市なるサン・ゼローム旅館で、催うされたと云ふことは、確に事實のやうである。それからチエコ・スロヴァキアの現大統領マサリクも、當時ボヘミアで大に暗中の飛躍を試みたらしい。が、ボヘミアに奥國の覆没を企てる秘密結社の存したのは、久しい以來のことであつて、決して新しいことではなかつたのだ。

此の結社は、名を同じくオムラヂナと呼んで居つたが、然し南部スラヴ地方の其れとは、別種のものらしく、五名の會員を「手」と言ふて、一人の「拇指」によつて率ゐられ、又た五人の「拇指」は、一つの卓れた手となり、そしてそれぞれに自らの「拇指」を選ぶように組織されて居るのであつて、一八九一年に創設され、労働者の叛亂、虚報の傳播、政府に對する積極的及び消極的抵抗等、ありとし有らゆる反抗を敢てして、大に當局者を手古摺らせたものである。

其の外にも、「地下のブラーグ」と稱する一つの秘密結社が、ボヘミアには存在したのであつて、此の結社は、オムラヂナと或種の連絡があつたらしく、夜盜又は威嚇のために、富裕な人々の邸宅の下に、通路を掘り抜いた所から、此の名を探るに到つた次第である。

チエコ・スロヴァク國外務大臣ベネスの言によれば、此の地下道の多くは、歐洲大戰の初めに於て、彼と大統領マサリクとにより、創設された秘密結社の仕業であつて、彼等は故意に此の結社を、公然たる犯罪的結社に擬らへて、*Mafia* と名づけ、有らゆる方面に於ける埃太利の敵を、陰に援助することを以て、唯一の目的とした、と云ふことだ。

さう云ふ次第であるから、汎スラヴ主義は、何と云つても歐洲大戰、即ちセラゼボト戰の責任を、免ることは出来ぬ。セルビアが手を下した埃國皇子の暗殺も實は埃太利をして、否やでも應でも戰を挑ましむるよう、露西亞が其の獻立をし

たからであつて、埃太利が逡巡して居る間に、露西亞は早くも動員令を下し、そして露西亞の同盟國たる佛蘭西は、埃太利が數時間も前に、兵を募つたので、露西亞も已むなく動員をした、と白々しくも英國を欺瞞した點に於て、露西亞と連累者たる、罪を負ふべきものでなければならぬ。

此の様な神を怖れざる陰謀が、果して何れほどの成功を遂げ得るものか。殷鑑遠からず、露西亞は既に觀面、其の天罰を蒙りて、一時無政府状態に陥つた上にトドの詰まりは、一團の狂人じみた惡漢共の食ひ物になり、そして今では國際間の仲間入りすら、満足に出来ぬ有様。セルビアも一時世界の地圖から抹消される悲運に陥つたが、後に同盟國のお慈悲に縋りて、辛やく「ユーゴト・スラビア」なる名で復活し、そして相も變らず、人種的反感に中毒した秘密結社や暗殺團やの殘徒によりて、引廻されて居る爲體であるから、勿論、今後のことは如何になり行くか、知れたものぢやない。

そして屢々セルビアを、破綻より救ひ出した勇敢匹ひなきモンテネグロは、佛蘭西の黙認により、暴力と欺瞞とで、併合されてしまつたけれども、縦し一人でも愛國者が生き残つて居る限り、斷じて此の儘では收まるまい。而してクロアチアは、解放の美名の下に、依然として壓制が行はれて居るので、是れ亦た住民何れも不平不満の状態である。

斯く觀來れば、ユーゴ・スラビアの四邊は、今しも暗雲低迷して、何時また何所に、如何様な椿事が湧き出でんも測り難き、洵に岌々乎たる有様だ。誰か是れを安定した状態と云ひ得ようぞ。

第四編 犯罪的秘密結社

第一章 波斯に於ける犯罪的秘密結社

「イスメリア團」(Ismailians)、一名「イスメーリット團」(Ishmaelites) 或は「暗殺團」は、本來、軍事的且つ宗教的の團體であつたから、彼等を犯罪的結社と見做すのは、敢て當らぬかも知れぬ。また或意味に於て、彼等は民族主義者の團體とも言へるから、セルビアの黒手組以上に、犯罪的なものとも見做し難いがさうかと云つて、彼等を博愛的な結社となすは、固より不穩當であらう。

一體此の暗殺團は、西曆一〇九〇年カイローなる回々教派の宣教師 Hassan Saïd ハッサン サイによりて創設されたが、彼の勢力日毎に加はるので、政府當局者の嫉視す ドハ